聖隷クリストファー大学

地域連携推進センター

年　報

地域連携事業 報告書

第14号

2022

聖隷クリストファー大学
地域連携推進センター

ごあいさつ

地域連携推進センター長の吉本好延と申します。聖隷クリストファー大学地域連携推進センター年報第14号（2022）の刊行にあたり、ご挨拶させていただきます。本学は、地域の保健医療福祉・教育の発展と地域振興に資する大学として、自治体や他大学と連携して事業を行っています。地域連携推進センターの活動は、2023年度現在で15年目に入っており、当年報では 2022年度の実績を報告しております。

2022年度は、1）地域連携事業の実施、2）浜松市と大学との連携事業～大学生による講座、等に取り組みました。

地域連携事業の実施の目的は、保健医療福祉・教育分野に貢献する事業・研究を推進することであり、本学周辺地域の企業・団体と協同で行う事業・研究を対象に『地域連携事業費』を配分しています。2022年度は計10件、計1,297,727円の事業費を配分しました。

「浜松市と大学との連携事業～大学生による講座」の目的は、市民と大学生が生涯学習を通じて、自己の成長や能力の向上を図る学習活動を推進し、その学びの成果を地域に還元していくことです。浜松市が企画・推進する事業に本学が参画しており、2022年度に年間で11回の講座を実施し、のべ148名の市民の方々に参加いただきました。

そのほか、当センターが窓口となり、地域での各種研修会への講師等の派遣、保健医療福祉・教育の専門分野の委員等の派遣を行っており、地域との連携・協働による課題解決を図り、地域の保健医療福祉・教育の更なる質の向上のため積極的に活動しています。派遣の実績につきましては、ホームページでも公開しておりますので、ご依頼の際は当センターのホームページよりお申し込みいただき、ご不明な点等ございましたら、地域連携推進センター事務局までお問い合わせください。

当センターの事業を通じて、行政や企業、他大学と連携を図り、地域の保健医療福祉・教育の発展と地域振興に貢献してまいります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

2023年12月

聖隷クリストファー大学
地域連携推進センター
センター長　吉本 好延

目　　次

Ⅰ. 2022年度事業報告

1.　地域連携事業　課題一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

2.　浜松市との連携 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5

3.　研修会講師等派遣 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7

4.　保健医療福祉団体の委員等派遣 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12

Ⅱ. 2022年度地域連携事業　報告書 ・・・・・・・・・・・・・・・・　16

地域連携推進センター運営会議　委員一覧

1. 地域連携事業　課題一覧

当センターでは、保健・医療・福祉・教育の実践現場との連携のもとに行う本学周辺地域の課題解決に向けた事業を対象として「地域連携事業費」を分配しています。2022年度は計10件、計2,866,317円の申請があり、地域連携推進センターによる審査の結果、10件の課題を採択し、計1,297,727円の事業費を配分しました。事業課題9件の報告書を当年報（P.16～）に掲載しておりますので、併せてご覧ください。

所属	代表者	職位	課題	連携機関	配分額（円）
看護学部	河野貴大	助教	領域の異なる多職種連携による在宅医療・介護連携推進事業～神経難病療養者が住みやすい浜松を創る～	静岡県立大学看護学部、北斗わかば病院	81,204
社会福祉学部	福田俊子	教授	本学学生を中心とした「きょうだい会」の設立	浜松市浜松手をつなぐ育成会、浜松地区肢体不自由児親の会、NPO法人あくしす あっとほーむ	34,170
社会福祉学部	鈴木光男	教授	こどもの感性と創造性を育む五感をとおした美的経験によるアートプログラム開発	アルテ・プラーサ、三島市文化振興課、清水町社会教育推進係、静岡県立大学、浜松市美術館、浜松学院大学	199,030
社会福祉学部	太田雅子	教授	PYPの理念を軸にした初等教育段階でのESD／環境教育カリキュラムの構築	聖隷クリストファー小学校	202,365（未実施）
リハビリテーション学部	矢倉千昭	教授	地域包括ケアシステムにおける社会資源アプリの開発	地域包括支援センター細江、静岡大学情報学部情報社会学科、浜松市高齢者福祉課	148,800
リハビリテーション学部	伊藤信寿	教授	保育場面における感覚統合理論を基盤とした遊びの実践	社会福祉法人住吉会幼保連携型認定こども園 小豆餅ゆすらうめこども園	105,048
リハビリテーション学部	伊藤信寿	教授	発達障がい児に対する余暇活動の実施	NPO法人むく多機能型事業所むく	110,572
リハビリテーション学部	鈴木達也	助教	作業経験の自分史が高齢者に与える効果の探索的研究	浜松北地域まちづくり協議会	83,460
リハビリテーション学部	飯田妙子	助教	リハビリテーション学部における産学連携による教育・実践モデルの構築	杏林堂薬局	97,360
リハビリテーション学部	柴本　勇	教授	かけがわ健活プロジェクト～茶ゃっと健康測定～	掛川東病院、掛川市役所 長寿推進課	235,718
				合計	1,297,727

＜合同研究発表会＞

2021年度に地域連携プロジェクト費の配分を受け実施された事業研究の報告会を下記日程で開催しました。

日時：2022年6月8日、9日

場所：聖隷クリストファー大学１号館１階　大会議室

発表：フラッシュトーク（口頭発表）および質疑応答

2022年度「地域連携事業費」の募集について

地域連携推進センター「地域連携事業費」について、下記の要領で事業計画を募集します。

1. 基本方針

地域連携推進センターの柱のひとつである「保健医療福祉・教育分野に係る全ての人たちとの共同事業・研究」を推進するために、本学周辺地域での連携を活かして保健医療福祉・教育分野に貢献する事業を募集します。

申請者は個人、組織を問いません。

2. 対象となる事業

①本学周辺地域の関連機関と連携・共同して、以下のいずれかを目的として行う事業を対象とします。
なお、本学周辺地域とは「静岡県内または愛知県東三河地域」とします。

ア. 本学周辺地域の課題解決を図る
イ. 本学周辺地域の保健医療福祉・教育の質の向上を図る

②連携先は静岡県内または愛知県東三河地域に所在する以下のいずれかとし、申請する事業の組織に連携先の担当者等が「協力者」として1名以上参画することを必要とします。

ア. 保健医療福祉・教育の実践現場
イ. 地方自治体、地域団体
ウ. 他大学
エ. 産業界（企業等）

3. 事業費の金額

事業費の配分総額は130万円、1件当たり最大40万円とします。

4. 事業対象期間

2022年4月1日～2023年3月31日

5. スケジュール

募集告知	1月中旬
計画の受付	2月7日（月）～3月7日（月）17時まで
地域連携推進センター運営会議<定例> （申請状況の報告／審査要領の確認／要領等を大きく逸脱した申請課題があった場合の対応の検討）	3月23日（水）
審査期間	4月1日（金）～4月11日（月）
地域連携推進センター運営会議開催<定例> （配分案の検討）	4月27日（水）
部長会で配分案決定	5月10日（火）
配分結果通知、執行可能※	5月11日（水）
執行役員会に配分結果を報告	5月13日（金）

※人間を直接対象とする調査・研究の要素が含まれる場合は全て倫理審査の「承認」が必要となります。この場合、倫理審査の承認後から執行可能となります。

6. 申請方法および申請期限

様式指定の「地域連携事業計画書」を作成し、地域連携推進センターメールアドレス「health-science@seirei.ac.jp」へ申請期限までにメールでご提出ください。申請期限以降は、提出データの修正・差し替えはできません。また、受付け漏れを防ぐため、メール受信の翌日中（土･日曜、祝祭日を挟む場合はその翌日）に受付け完了のメールを返信します。返信がない場合には総務部担当者（辻村・中倉）へご連絡ください。

申請期限：3月7日（月）17時

7. 申請における注意事項

- 配分された事業費の執行は、部長会で配分案が決定し、配分結果を通知した後からとなります。なお、人間を直接対象とする調査・研究の要素が含まれる場合は、全て倫理審査の「承認」が必要となるため、配分結果の通知後で且つ倫理審査の承認を得た後から執行可能となります。通知前（倫理審査が必要な場合は、倫理審査の「承認」前）の執行は認められませんのでご注意ください。
- 計画書の経費内訳欄には、できるだけ具体的な積算根拠を記載してください。算出根拠の未記入等、記載内容に不備があった場合は、該当経費は配分対象にならないことがあります。
- 限られた予算を有効に配分するため、既に研究室に備えられているパソコン、プリンター、総務部で貸出をしているデジカメ、ビデオカメラ、ICレコーダー等の申請はできるだけご遠慮ください。特別な事情により申請をする場合は、計画書に申請理由を添付してください。
- 事業費の配分は1年単位です。事業を複数年度にわたり遂行する予定でも、年度ごとの申請が必要です。
- 計画書の一部を地域連携推進センターHPにて公表します。
- 事業の組織における連携機関の担当者等は「協力者」とします。

8. 審査の方法

地域連携推進センターは、配分案を検討するにあたり、申請された計画書に対して以下の項目を目安にして審査をします（15点満点。絶対評価）。

項　目
(1)　事業の社会的重要性＜5点満点＞ ・社会的に見て、推進すべき重要な事業内容であるか。 ・事業の遂行によって地域の保健医療福祉・教育分野への貢献が期待できるか。
(2)　計画・方法・体制の妥当性＜5点満点＞ ・目的を達成するため、実施スケジュールや実施方法等は具体的かつ適切であるか。 ・目的を達成するための実施体制は適切であるか。
(3)　申請経費の妥当性 ＜5点満点＞ ・経費は実施計画と整合性がとれたものとなっているか。

9. 成果の提出

- 代表者等は、事業の成果を取りまとめ、次の①については2023年4月末日まで、②については2023年6月末までに地域連携推進センターに提出してください。
  ①事業成果報告書（A4版サイズ、3～4枚程度／地域連携推進センター年報等に掲載）
  ②一般向けの抄録（A4版サイズ、1枚／地域連携推進センターHP等に掲載）
- 代表者等は、学内合同研究発表会（5月または6月開催予定）で発表する義務を負います。

※関連書類

- 2022年度 地域連携事業費 計画書

2. 浜松市との連携

浜松市と大学との連携事業～大学生による講座　2022年度実施報告

本学は、浜松市が企画・推進する事業「浜松市と大学との連携事業～大学生による講座」に参画しています。この事業は、市民と大学生が生涯学習を通じて自分の成長や能力の向上を図る学習活動（生涯学習）を推進し、その学びの成果を地域づくりにつなげていくことを目的に行われています。本学では2022年度に年間で11回の講座を実施し、のべ148人の市民の方々に参加いただきました。2023年度も継続して本事業に参加します。

講座名	対象	担当学科等	開催日	会場	参加者数
認知症予防 ～ゲームやクイズで楽しく 認知症予防をしてみませんか～	高齢者	看護学科	2022年10月29日	積志協働センター	10
すこやかな生活を送るための 「貯筋」をしませんか	高齢者	理学療法学科	2022年11月12日	西部協働センター	9
			2022年11月26日	南部協働センター	18
			2022年12月17日	富塚協働センター	7
自分の体の動きと使い方を 知ろう！ ～走力･体力アップのヒント～	小学 4～6年生	理学療法学科	2022年11月26日	二俣協働センター	11
			2022年12月3日	三ヶ日協働センター	21
認知症予防 海馬を鍛えよう！！	どなたでも	作業療法学科	2022年9月7日	熊ふれあいセンター	14
			2022年11月9日	東部協働センター	18
			2022年11月30日	南陽協働センター	20
			2023年2月10日	竜川ふれあいセンター	12
自分のカラダとの上手な 付き合い方	40歳代～ 60歳代 女性	看護学科 助産学専攻科	2023年2月20日	三方原協働センター	8

浜松市ウエルネス認証事業　2022年度実施報告

事 業 名：　女子大学生の参画による女性のがん（乳がん・子宮頸がん）検診の未受診理由に関する実態調査を踏まえた「がん検診等に関する啓発教材」の開発　－受診率の低いAYA世代に焦点をあてて－

事業主体：聖隷クリストファー大学SGEプロジェクト

連携企業、団体：聖隷福祉事業団　聖隷予防検診センター、浜松市

実施期間：令和4年7月6日（水）～令和5年3月31日（金）

実施場所：聖隷クリストファー大学、常葉大学、アクトシティ浜松大ホール　他

実施内容：　女性特有のがん（乳がん・頸がん）の中でも受診率が低いAYA世代の女性かつ、医療福祉系大学で学習している学生が主体となり、検診を受診するにあたり、本当に知りたいことを調査し、ピアエデュケーション（同年代）に提案をすることで受診に対する不安を軽減することができ、検診の受診に繋がる効果があると考え、啓発活動を下記のとおり実施した。

① 子宮頸がん検診や乳がん検診を受けづらいと感じている理由の実態調査

② AYA世代の女性が女性特有のがん（乳がん・頸がん）検診に対する正しい知識や情報が得られる「啓発教材」の開発

③ AYA世代の女性が女性特有のがん（乳がん・頸がん）検診受診対象者に、開発した「啓発教材」を用いて受診を促す啓発活動

事業の効果、成果：

①の活動については、AYA世代の対象者に対する調査数を集める事が難しかった。実態としては十分明らかにすることができなかった。乳がん検診を受けない理由や、4割を超える者が子宮頸がん検診の定期的な受診に至っていない実態、検診を受診しない理由等が明らかとなった。

②の活動の成果物はページ下部に掲載。

③の活動については、疾患や検診に関する理解を一層深めることができ、説明スキルを向上させることができた。医療的知識の有無によって、啓発の際に伝える言葉の選び方や伝え方等、工夫が必要であること、興味関心が薄い対象者に、興味を持ってもらうにはどのようにしたら良いか等、様々な課題に目を向ける機会を得た。対象者の背景を知ったうえで、丁寧な啓発活動を継続的に実施していくことの重要性を認識することができた。

啓発活動により、何が分かりづらいのか、どのような内容であれば、理解しやすいのか等、感覚的ではあるが掴むことができた。

乳がん検診　リーフレット

子宮頸がんワクチン
リーフレット

※本事業は令和4年度浜松市ウエルネス認証事業費補助金の採択を受け実施いたしました。浜松市ウエルネス認証事業は、浜松市が「予防・健幸都市」の実現に向け、市民の多様な健康ニーズへの対応や健康無関心層の行動変容を促進するため、市内の企業及び団体が連携して実施する予防・健康事業です。

3. 研修会講師等派遣

当センターが窓口となり、静岡県内で実施した講師等派遣の一覧です。

No	主催	内容	担当 (担当教員の所属・職位は2022年度当時)
1	医療法人社団一穂会 西山病院グループ	看護管理者研修 テーマ：看護管理者研修サーバントリーダーシップ 対　象：西山病院グループ 看護次長、看護師長	看護学部 看護学科 教授　樫原理恵
2	医療法人社団　心	看護管理者研修 テーマ：看護サービスのマネジメント 対　象：医療法人社団　心　看護管理者	看護学部 看護学科 教授　鶴田惠子
3	静岡県健康福祉部 こども未来局	令和４年度　静岡県子育て支援員研修 テーマ：地域保育コース　共通科目　小児保健Ⅰ・Ⅱ 対　象：地域子育て支援員	看護学部 看護学科 教授　市江和子
4	浜松市	第 30 回「浜松市民アカデミー」 テーマ：寝たきりを予防する ～100 年歩くための体力チェックと運動～ 対　象：18歳以上の浜松市周辺在住の方（高校生を除く）	看護学部 看護学科 教授　安田智洋
5	浜松ホトニクス株式会社 労働組合青年部	健康づくりセミナー テーマ：寝たきりを予防する！ 「100 年歩く」体力チェックと運動 対　象：組合員とそのご家族	看護学部 看護学科 教授　安田智洋
6	伊豆市健康長寿課	伊豆市　専門職連絡会議　勉強会 テーマ：地域をまるごとみる保健師になるために 対　象：伊豆市　保健師・管理栄養士	看護学部 看護学科 准教授　江口晶子
7	医療法人社団八洲会 袋井みつかわ病院	研究計画書指導 対　象：担当部署の病棟看護師、弁護士その他職種	看護学部 看護学科 准教授　藤浪千種
8	菊川市ケアマネジャー 協議会	菊川市ケアマネジャー防災研修会 テーマ：アクションカードの作成について 対　象：菊川市ケアマネジャー協議会会員	看護学部 看護学科 准教授　若杉早苗
9	静岡県西部 健康福祉センター	令和４年度新任期地域保健従事者現任研修会 テーマ：地域診断と PDCA サイクル 対　象：地域保健活動に従事して1～3年目の管内市町 及び西部健康福祉センターの保健師・栄養士	看護学部 看護学科 准教授　若杉早苗
10	静岡県作業所連合会・わ 西部地区会	職員研修会 テーマ：地域福祉と作業所の関わり 対　象：西部地区の障害者作業所職員他	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　佐藤順子
11	浜松市西区 社会福祉課	西区民生委員・児童委員、主任児童委員研修会 テーマ：社会福祉を取り巻く状況と民生委員への期待 （民生委員「経験者」への期待も含めて） 対　象：西区民生委員・児童委員、主任児童委員、 福祉関係機関	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　佐藤順子

No	主催	内容	担当 (担当教員の所属・職位は2022年度当時)
12	浜松市北区長寿保険課	介護給付等費用適正化事業における 北区介護支援専門員連絡協議会北区包括合同研修会 テーマ：『地域ケア会議に関する疑問を解消して、活用しよう』 講義内容『地域ケア会議について』 対　象：北区内介護保険サービス事業所介護支援 専門員、地域包括支援センター職員	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　川向雅弘
13	御前崎市高齢者支援課	介護支援専門員連絡会研究会 テーマ：高齢者の自立支援及び自己決定支援について 対　象：御前崎市及び近隣の居宅介護支援事業所の ケアマネジャー	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　川向雅弘
14	磐田市民生委員 児童委員協議会	全体研修会 テーマ：民生委員・児童委員の役割と期待について 対　象：磐田市民生委員・児童委員	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　川向雅弘
15	一般社団法人 静岡県介護福祉士会	令和４年度介護福祉士実習指導者講習会 テーマ：介護過程の理論と指導方法 対　象：介護福祉士資格取得後、実務経験が３年以上で 養成校実習施設の実習指導者として 登録する者または予定している者	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　野田由佳里
16	地域包括支援センター 和合	家族介護教室 テーマ：基本の介護技術 対　象：介護者、援助者、介護保険や高齢者福祉に 興味のある者	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　野田由佳里
17	社会福祉法人 聖隷福祉事業団 施設・在宅看護職 育成委員会	施設・在宅看護職員研修 テーマ：看護介護の協働に関する法的根拠や制度 対　象：聖隷福祉事業団　施設・在宅看護職員のうち、 ラダーレベルⅢ申請予定者及び希望者	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　野田由佳里
18	社会福祉法人 静岡県社会福祉協議会 静岡県社会福祉 人材センター	令和４年度外国人介護職員「研修交流会」 テーマ：将来設計の第一歩 ～介護の資格をとるには？在留資格の仕組みは？～ 対　象：静岡県内の介護施設に勤務する 外国人介護職員等	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　野田由佳里
19	一般社団法人 静岡県介護福祉士会	高齢化に伴う精神障がい者の理解と対応研修 テーマ：高齢化に伴う精神障がい者の理解と対応 対　象：障がい者支援に携わる介護福祉士・介護職・関係者	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　大場義貴
20	豊川市地域 医療連携協議会	令和４年度第１回医療・介護合同研修会 テーマ：ライフステージを通した不登校・ひきこもり・ 発達障害・精神障害等の理解と心理社会的支援 ～事例から学ぶこと～ 対　象：豊川市内の医療・介護に携わる医師及び職員、 行政機関職員等	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　大場義貴

No	主催	内容	担当 (担当教員の所属・職位は2022年度当時)
21	浜松市介護 サービス事業者 連絡協議会	施設系サービス部会　研修会 テーマ：人材定着に向けた環境・組織作り ～不本意な離職を減らすために～ 対　象：浜松市介護サービス事業者連絡協議会所属の職員	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　横尾恵美子
22	浜松市民生委員 児童委員協議会／ 浜松市／ 浜松市社会福祉協議会	第 11 回（令和 4 年度）浜松市民生委員児童委員大会 第 2 部「全員研修会」 テーマ：児童福祉を取り巻く環境と 児童委員・主任児童委員の役割 対　象：浜松市の民生委員児童委員、主任児童委員	社会福祉学部 社会福祉学科 准教授　泉谷朋子
23	浜松市北区民生委員・ 児童委員協議会 児童福祉部	専門部会研修会 テーマ：児童福祉に関わる民生委員の役割について 対　象：北区民生委員・児童委員　児童福祉部会部員	社会福祉学部 社会福祉学科 准教授　泉谷朋子
24	一般社団法人 静岡県介護福祉士会	知的障がい者の理解と対応研修 テーマ：知的障がい者の理解と関わり方、 広汎性発達障害の特性と対応ポイント、 高齢化に伴う知的障がい者の変化と対応について 対　象：障がい者支援に携わる介護福祉士・介護職・関係者	社会福祉学部 社会福祉学科 助教　井川淳史
25	一般社団法人 静岡県介護福祉士会	令和 4 年度　介護福祉士ファーストステップ研修 テーマ：コミュニケーション技術の応用的な展開（認知症） 対　象：介護福祉士資格取得後 2 年以上実務に 従事した介護職員等	社会福祉学部 社会福祉学科 助教　井川淳史
26	浜松市障害保健福祉課	令和 4 年度　高齢者・障害者虐待防止研修会 テーマ：高齢化に伴う知的障害のある方の権利擁護 対　象：福祉関係事業者（包括、障害者相談、高齢者・ 障害者施設、行政関係者）	社会福祉学部 社会福祉学科 助教　井川淳史
27	浜松市私立幼稚園協会	夏季教員研修会 テーマ：アート思考の続きの一歩 ～のぞき見レッジョの幼児教育～ 対　象：浜松市内私立幼稚園に勤務する保育士	社会福祉学部 こども教育福祉学科 教授　鈴木光男
28	浜松市立鴨江小学校	令和 4 年度のクラブ活動における講座 テーマ：身近な用具や素材で遊ぼう！ 対　象：小学 4 ～ 5 年生	社会福祉学部 こども教育福祉学科 教授　鈴木光男
29	磐田市 PTA 連絡協議会	磐田市 PTA 連絡協議会成人教育委員会 テーマ：ポストコロナ時代の学校教育と PTA 対　象：磐田市 PTA 連絡協議会成人教育委員及び市 P 連役員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 教授　鈴木光男
30	静岡県健康福祉部 こども未来局 こども未来課	令和4年度放課後児童支援員認定資格研修 テーマ：学校・地域との連携 対　象：放課後児童支援員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 教授　鈴木光男
31	磐田ライオンズクラブ	磐田ライオンズクラブ 12 月第1例会 テーマ：学校の今とこれから～みんなでチーム学校に！ 対　象：磐田ライオンズクラブ会員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 教授　鈴木光男

No	主催	内容	担当 (担当教員の所属・職位は2022年度当時)
32	公益社団法人全国里親会、 関東甲信越静里親協議会、 浜松市里親会	第 69 回　関東甲信越静里親協議会浜松市研修大会 テーマ：里親と里子を支える 対　象：里親、児童福祉関係者、学生等	社会福祉学部 こども教育福祉学科 教授　藤田美枝子
33	浜松市	浜松市ヤングケアラーを理解するための講演会 テーマ：～ヤングケアラー支援で大切なことを考えよう～ 対　象：浜松市内在住または通勤通学者	社会福祉学部 こども教育福祉学科 教授　藤田美枝子
34	特定非営利活動法人 しずおか・子ども家庭 プラットフォーム	令和 4 年度 児童養護施設等職員研修 テーマ：①基礎研修 ②資質向上研修 対　象：①当該研修を受講していない者 及び所属長が認める者 ②職員キャリアを積まれた職員及び所属長が認める者	社会福祉学部 こども教育福祉学科 教授　藤田美枝子
35	ハローこども園	園内実践研修 テーマ：健康な心と体を育む環境づくりをめざして 気になる子にはわけがある　発達過程と遊び 対　象：ハローこども園　保育教諭、職員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 教授　和久田佳代
36	静岡県 私立幼稚園振興協会	令和 4 年度 特別支援教育研修会 テーマ：発育発達過程に沿った子どもの運動遊び 対　象：静岡県内私立幼稚園・認定こども園の教員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 教授　和久田佳代
37	株式会社アレミティ	講演会 テーマ：運動遊びの重要性、基礎感覚の育ちや感覚 統合を促す運動遊び、室内での展開方法等について 対　象：konoki グループ職員	社会福祉学部 こども教育福祉学科 教授　和久田佳代
38	静岡県健康福祉部 こども未来局	令和 4 年度　静岡県子育て支援員研修 テーマ：地域保育コース 共通科目　乳幼児の発達と心理 対　象：静岡子育て支援員研修受講者	社会福祉学部 こども教育福祉学科 助教　杉山沙旺美
39	特定非営利活動法人 愛知県理学療法学会	教育研修部主催 講習会（脳卒中者の予後予測） テーマ：在宅脳卒中者の理学療法評価を用いた転倒予測 対　象：理学療法士	リハビリテーション学部 理学療法学科 教授　吉本好延
40	浜松市 リハビリテーション病院	運動器健診の評価・計測 対　象：小中学生	リハビリテーション学部 理学療法学科 准教授　根地嶋誠
41	浜松市 ふれあい交流センター萩原	元気はつらつ教室萩原 テーマ：転倒予防教室 対　象：地域の高齢者	リハビリテーション学部 理学療法学科 助教　高山真希

No	主催	内容	担当 (担当教員の所属・職位は2022年度当時)
42	かけがわ 乳幼児教育未来学会	発達支援研究部講話 テーマ：第１回：発達障がい児への理解と支援 ～主に乳児の発達について 第２回：発達障がい児への理解と支援 ～主に幼児の発達について 第３回：発達障がい児への理解と支援 ～主に保護者対応・支援について 対　象：かけがわ乳幼児教育未来学会会員	リハビリテーション学部 作業療法学科 教授　伊藤信寿
43	浜松市教育委員会	令和４年度　家庭教育講座 テーマ：子どもの「こころ」と向き合う子育て ～子どもに伝わりやすいコミュニケーション方法とは？～ 対　象：浜松市立中ノ町小学校　１年生の保護者	リハビリテーション学部 作業療法学科 助教　飯田妙子
44	静岡県立浜松みをつくし 特別支援学校	児童生徒の学習支援講師 テーマ：・事例児、事例生徒の巡回 ・担当教員との情報共有 対　象：事例児、事例生徒、担当教諭	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 教授　小坂美鶴
45	静岡県立浜松みをつくし 特別支援学校	児童生徒の学習支援講師 テーマ：授業参観（各学部） 指導・支援方法についての助言・共有 対　象：担当教諭	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 教授　小坂美鶴
46	聖隷こども園 こうのとり富丘	発達および構音の検査 対　象：年中児	リハビリテーション学部 言語聴覚学科 教授　小坂美鶴

4. 保健医療福祉団体の委員等派遣

No	内容	担当 （担当教員の所属・職位は2022年当時）
1	静岡県専任教員養成講習会運営委員会　委員 任期：2022年8月1日～2024年3月31日 主催：静岡県看護協会	看護学部 看護学科 教授　佐久間佐織
2	令和4年度　役員・委員研修会　委員 任期：2022年7月11日 主催：公益社団法人静岡県看護協会	看護学部 看護学科 教授　三輪眞知子
3	浜松市母子保健推進会議　委員 任期：2020年4月1日～2023年3月31日 主催：浜松市健康増進課母子グループ	看護学部 看護学科 准教授　神﨑江利子
4	赤十字講習　指導員 任期：2022年5月24日 主催：日赤浜松市地区本部東区地区長	看護学部 看護学科 准教授　岡田眞江
5	赤十字講習　指導員 任期：2022年5月30日 主催：日赤袋井市地区長	看護学部 看護学科 准教授　岡田眞江
6	赤十字講習 指導員 任期：2023年2月17日 2023年2月18日 2023年2月19日 主催：日本赤十字社静岡県支部	看護学部 看護学科 准教授　岡田眞江
7	赤十字講習　指導員 任期：2022年6月6日 主催：日赤磐田市地区長	看護学部 看護学科 准教授　岡田眞江
8	赤十字講習　指導員 任期：2022年6月30日 主催：日赤浜松市地区本部北区地区長	看護学部 看護学科 准教授　岡田眞江
9	赤十字講習　指導員 任期：2022年8月25日 主催：日赤浜松市地区本部天竜区地区長	看護学部 看護学科 准教授　岡田眞江
10	浜松市建築審査会　委員 任期：2020年9月1日～2023年8月31日 主催：浜松市都市整備部建築行政課	看護学部 看護学科 准教授　若杉早苗
11	令和4年度保健委員担当者連絡会　アドバイザー 任期：2023年2月27日 主催：静岡県西部健康福祉センター	看護学部 看護学科 准教授　若杉早苗
12	天竜厚生会苦情検討委員会　委員 任期：2021年4月1日～2023年3月31日 主催：社会福祉法人天竜厚生会	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　佐藤順子

No	内容	担当 （担当教員の所属・職位は2022年当時）
13	事務事業評価 外部評価委員会　アドバイザー 任期：2022年9月26日 主催：浜松市社会福祉協議会	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　佐藤順子
14	令和4年度（第82回） 関東ブロック民生委員児童委員活動研究協議会（浜松大会）　コーディネーター 任期：2022年7月28日～7月29日 主催：関東ブロック民生委員児童委員連合協議会／ 浜松市民生委員児童委員協議会	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　川向雅弘
15	高齢者虐待防止支援事業 アドバイザー 任期：2022年4月1日～2023年3月31日 主催：浜松市	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　野田由佳里
16	第8回静岡県高等学校介護技術コンテスト 審査員 任期：2022年7月30日 主催：静岡県高等学校福祉教育研究会	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　野田由佳里
17	浜松市若者支援スーパーバイザー 任期：2022年4月1日～2025年3月31日 主催：浜松市こども家庭部次世代育成課	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　大場義貴
18	令和4年度　不登校対策推進協議会　委員 任期：2022年4月1日～2023年3月31日 主催：浜松市教育委員会	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　大場義貴
19	浜松市発達障害者支援地域協議会　委員 任期：2022年4月1日～2024年3月31日 主催：浜松市こども家庭部	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　大場義貴
20	浜松市ひきこもり地域支援センター企画検討委員会　委員 任期：2022年4月1日～2023年3月31日 主催：浜松市ひきこもり地域支援センター	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　大場義貴
21	浜松市自殺対策連携会議　専門委員 任期：2022年4月1日～2025年3月31日 主催：浜松市健康福祉部健康医療課	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　大場義貴
22	浜松地域若年者就労支援推進協議会　委員 任期：2022年4月1日～2023年3月31日 主催：ＮＰＯ法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会 地域若者サポートステーションはままつ	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　大場義貴
23	いじめの重大事態の調査委員 任期：2023年1月23日～2023年3月31日 主催：浜松市教育委員会	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　大場義貴
24	第三者委員 任期：2022年4月1日～2024年3月31日 主催：社会福祉法人　遠州仏教積善会	社会福祉学部 社会福祉学科 教授　福田俊子

No	内容	担当 （担当教員の所属・職位は2022年当時）
25	令和4年度（第82回） 関東ブロック民生委員児童委員活動研究協議会（浜松大会） コーディネーター 任期：2022年7月28日～7月29日 主催：関東ブロック民生委員児童委員連合協議会／ 浜松市民生委員児童委員協議会	社会福祉学部 社会福祉学科 准教授　泉谷朋子
26	評議員 2017年4月1日～2023年6月定時評議員会まで 主催：社会福祉法人七恵会	社会福祉学部 社会福祉学科 准教授　落合克能
27	評議員 任期：2020年度の最終のものに関する定時評議員会の終結の時から 2024年度の最終のものに関する定時評議員会の終結の時まで 主催：社会福祉法人みどりの樹	社会福祉学部 社会福祉学科 准教授　落合克能
28	評議員 任期：2021年6月～2025年6月 主催：社会福祉法人三宝会	社会福祉学部 社会福祉学科 准教授　落合克能
29	役員 任期：2021年6月27日～2023年6月26日 主催：NPO法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会（E-jan）	社会福祉学部 社会福祉学科 准教授　落合克能
30	理事 任期：2021年6月24日～2023年度の定時評議員会終結まで 主催：社会福祉法人和光会	社会福祉学部 社会福祉学科 准教授　落合克能
31	第三者委員 任期：2022年4月1日～2023年3月31日 主催：社会福祉法人十字の園	社会福祉学部 社会福祉学科 准教授　落合克能
32	浜松市営住宅管理運営委員会　委員 任期：2019年7月1日～2022年6月30日 主催：浜松市都市整備部住宅課	社会福祉学部 社会福祉学科 助教　井川淳史
33	浜松市福祉人材バンク運営委員会　委員 任期：2022年4月1日～2024年3月31日 主催：社会福祉法人浜松市社会福祉協議会	社会福祉学部 社会福祉学科 助教　井川淳史
34	第三長上苑及びデイサービスセンターの運営推進会議　委員 任期：2022年4月1日～2024年3月31日 主催：社会福祉法人七恵会	社会福祉学部 社会福祉学科 助教　井川淳史
35	学校運営協議会　委員 任期：2022年4月1日～2023年3月31日 主催：静岡県立浜松みをつくし特別支援学校	社会福祉学部 こども教育福祉学科 教授　鈴木光男
36	磐田市芸術祭第11回ジュニアアート展　審査員 任期：2022年10月6日 主催：磐田市文化協会	社会福祉学部 こども教育福祉学科 教授　鈴木光男

No	内容	担当 （担当教員の所属・職位は2022年当時）
37	浜松市社会福祉審議会児童福祉専門分科会　委員 任期：2021年4月1日～2024年3月31日 主催：浜松市こども家庭部次世代育成課	社会福祉学部 こども教育福祉学科 教授　鈴木光男
38	浜松市社会福祉審議会児童福祉専門分科会児童処遇部会　委員 任期：2021年4月16日～2024年4月15日 主催：浜松市こども家庭部	社会福祉学部 こども教育福祉学科 教授　藤田美枝子
39	浜松市障害者施策推進協議会　委員 任期：2020年5月11日～2023年5月10日 主催：浜松市健康福祉部障害保健福祉課	リハビリテーション学部 作業療法学科 教授　新宮尚人
40	令和4年度浜松市発達支援教育巡回指導員 任期：2022年5月9日～2023年3月18日 主催：浜松市教育委員会	リハビリテーション学部 作業療法学科 教授　伊藤信寿

2022年度
地域連携事業　報告書

領域の異なる多職種連携による在宅医療・介護連携推進事業
～神経難病療養者が住みやすい浜松を創る～

代 表 者：河野貴大（看護学部）
分 担 者：吉本好延（リハビリテーション学部理学療法学科）
連携機関：加納江理（静岡県立大学看護学部）、
赤石ゆかり、小出弘寿、松下太一（北斗わかば病院）

【背景】

パーキンソン病や筋萎縮性側索硬化症等の神経難病は進行性であり、神経変性をきたす神経の系統や支配する身体部位により様々な症状・障害を呈する。現在、病院の機能分化や在院日数の短縮等により、神経難病療養者は在宅で過ごすことが主体となっている一方で、在宅療養を支援する訪問看護師は【難病への対応】や【患者の状態の正確なアセスメントや判断】、【介護サービスの調整を担うこと】等に不安や困難感、負担感を抱いていることが報告されている（曽根、2018）。

そこで、申請者らは2018年度より「神経難病支援者の会」を発足し、在宅療養者が病期に応じて必要な支援を受けることができるように、支援者のスキルアップを目的とした研修会や交流会の企画・運営を行っている。支援者の会のメンバーは、病院看護師や訪問看護師、理学療法士や作業療法士、社会福祉士、薬剤師等多施設・多職種の専門家で構成されており、隔月会議を行い、神経難病療養者の在宅支援について情報共有や課題の抽出を行っている。2021年度の会議では、浜松市における神経難病療養者の在宅ケアにおける課題として①神経難病の病態や治療について学修する機会が少ない、②進行する難病に対して支援のタイミングを判断することが難しい、③困った時、誰に相談すれば良いか分からない、という3つが挙げられた。これらは先行研究とも合致する状況であり、重点的な対策を講じる必要があると考えられた。

【目的】

本事業の目的は、地域の神経難病療養者に対する在宅ケアの質を向上し、療養者と家族が安心して地域で暮らせるようになることである。2022年度は以下2つを目標とした。

1) 神経難病療養者の在宅療養に携わる支援者の知識・技術の向上
2) 神経難病療養者の支援に関わる多職種間の「相談しやすい関係づくり」の推進

【方法・実施内容】

神経難病療養者を支えるネットワーク作りのための多職種交流を兼ね、病期に応じた医療・在宅サービスや福祉用具・機器についての理解を深めるための研修会を4回開催した。各研修会終了後には研修会の質向上を目的にWEB上で回答する任意のアンケートを実施した。また、研修会の企画・運営や地域の課題に関する情報共有のため、専門職による会議を隔月開催した。

①神経難病療養者とのコミュニケーションに関する研修会

日時：2022年10月8日（土）13：30～17：00
場所：北斗わかば病院　南棟2階リハビリテーション室
対象：在宅領域を中心に医療・介護・福祉に関わるすべての職種
講師：NPO法人　ICT救助隊
内容：ICTを活用したコミュニケーション支援に関する講義の後、研修会の参加者を4グループに分け、4つのブース（透明文字盤の体験、視線入力装置の操作体験、オリジナル入力スイッチの体験、iPadを活用した入力体験）をそれぞれ30分ずつ体験した。

②介護福祉士、訪問介護員を対象とした透明文字盤に関する研修会

日時：2023年2月10日（金）17：30～18：30
場所：ヘルパーステーションやわらぎ（野の花棟4階）
対象：介護福祉士、訪問介護員
講師：北斗わかば病院　言語聴覚士
内容：講師による講義の後、参加者同士で透明文字盤を体験した。

③ALS療養者の呼吸リハビリテーションに関する研修会

日時：2023年2月11日（土）17：30～18：30
場所：聖隷研修センター2階研修室
対象：訪問看護ステーションに勤務する専門職者
講師：北斗わかば病院　理学療法士
内容：ALSの概要やリハビリテーションに関する講義の後、実際にベッド上で呼吸の評価や介助、排痰介助の実技を行った。

④ケアマネジャーを対象とした透明文字盤に関する研修会

日時：2023年2月17日（金）13：30～14：30
場所：地域包括支援センター和地
対象：ケアマネジャー
講師：北斗わかば病院　言語聴覚士
内容：講師による講義の後、参加者同士で透明文字盤を体験した。

【結果・実施後の評価】

①神経難病療養者とのコミュニケーションに関する研修会

参加者は41名で、職種は看護師、理学療法士、作業療法士、社会福祉士、ケアマネジャー、学生等であった（表1）。研修会後のアンケートでは、有意義な時間であったかという問いに対し回答のあった37名のうち「大変良かった」と回答した者が31名（83.8%）であった。自由記載では、「コミュニケーションツールを使用したことがなかったため非常に勉強になった」や「実際に機器に触れ、操作の大変さが理解できた」、「慣れたらとても便利なものになると感じたが、慣れるまでの期間は利用者さんにとってとてもストレスになると思った」等の意見が聞かれた。また、今後の要望として、「ICT機器を導入するまでの具体的な流れが知りたい」や「導入後のフォローアップ体制について教えてほしい」等の意見があった。

表1. ①研修会参加者の職種

職種	担人数（n＝41）
看護師	15
理学療法士	3
作業療法士	3
ケアマネジャー	9
社会福祉士	4
介護福祉士	1
相談支援専門員	1
薬剤師	1
学生	4

ICT救助隊による講義

透明文字盤の体験

視線入力装置の操作体験

②介護福祉士、訪問介護員を対象とした透明文字盤に関する研修会

参加者は11名であった。実施後のアンケートでは有意義な時間であったかという問いに対し、回答のあった8名のうち「大変良かった」と回答している者が5名（62.5%）、「良かった」と回答している者が3名（37.5%）であった。自由記載では「初めて透明文字盤を体験出来てとてもよかった」や「患者さんの視線に合わせて文字盤を動かすのは難しかった」、「透明文字盤を挟んでいても、お互いに視線を合わせることで言葉以外の感情も伝え合える気がした」等の意見が聞かれた。今後の要望として、「視覚障害の方や肢体不自由な方等の援助の仕方を教えてほしい」、「難病の方への支援等、専門職からの研修の機会をもっと設けてほしい」等の意見が聞かれた。

言語聴覚士による講義

透明文字盤の体験

③ALS療養者の呼吸リハビリテーションに関する研修会

参加者は23名（看護師13名、理学療法士または作業療法士10名）であった。実施後のアンケートでは有意義な時間であったかという問いに対し、回答のあった20名のうち「大変良かった」と回答している者が17名（85%）、「良かった」と回答している者が3名（15%）であった。自由記載では「実技と講義を交互でしてくれてとても良かった」や「実際に呼吸介助をする現場があった中で自分が正しくできているか確認できてよかった」、「普段これでいいのかと悩みながら実施していたことが明確になり、とても有意義だった」等の意見が聞かれた。また、「神経難病の方への支援のアプローチについて、難しい事や不明点等あれば、いつでも相談して良いと言ってくださったので、ありがたい」という意見もあった。今後の要望として、「呼吸筋のストレッチや体位ドレナージ、スクイージングについても実技指導してほしい」、「定期的に実技研修してほしい」といった意見が聞かれた。

理学療法士による講義

実技指導

④ケアマネジャーを対象とした透明文字盤に関する研修会

参加者は12名であった。実施後のアンケートの自由記載では「透明文字盤を実体験する事で理解が深まった」、「コミュニケーションが取れないことのつらさがわかった」等の意見が聞かれた。

言語聴覚士による講義

透明文字盤の体験

上記研修会以外に、専門職による会議を2022年度内に計6回（4月、6月、8月、9月、11月、2月）実施した。会議のメンバーは病院看護師や訪問看護師、理学療法士や作業療法士、社会福祉士、薬剤師、大学教員等であり、研修会の企画・調整を行うとともに地域の課題の共有を行った。会議では、個別に相談される件数が増えたことが挙げられ、残された地域の課題として神経難病患者のコミュニケーション機器に実際に触れる機会が少ないこと、支援者がALS療養者の呼吸リハビリテーションに困難感があること、在宅において適切な栄養管理や食事指導が困難なこと等が挙げられた。

【考察および今後の課題】

2022年度に実施した4つの研修会では、いずれも参加者の満足度は高く、有意義な時間であったと回答している参加者が多かった。特にコミュニケーション機器に関する研修会では実際に機器に触れ、体験する機会を得られたことで療養者に対する理解につながったという意見が多く聞かれた。コミュニケーション機器は病院で導入されることが多い一方で、実際に活用する場は在宅であり、訪問看護師やケアマネジャー等の在宅療養を支援する専門職が機器の扱い方や困難さ、注意点等を体験しながら学ぶことのできる研修会の開催は非常に効果的であったと考えられる。研修会は実際に透明文字盤や視線入力装置を体験していくため、多人数での実施は難しく、今回の研修会においても参加を希望していたが申し込むことができなかった者もいた。今後も継続的に研修会を企画・開催し、在宅療養に携わる支援者の知識・技術の向上を図ることが重要である。

呼吸リハビリテーションに関する研修会では、「いつでも相談して良いと言ってくださったので、ありがたい」といった意見も聞かれ、研修会での交流が困ったときの相談先として顔の見える関係づくりにも効果があったと考えられる。また、「専門職による会議においても研修会をとおして個別に相談される件数が増えた」、「地域のつながりが密接になってきた」といった意見も聞かれ、今後も事業を継続することで神経難病療養者を支えるネットワークの構築につながることが期待できる。

以上のことから、2022年度の目標は概ね達成できた。多施設・多職種の専門家が組織的に連携して、神経難病療養者の支援者を継続的に支援する取り組みは全国的にも数少ない。本事業が全国のモデル事業となれば、多くの療養者に『在宅生活の継続』という選択肢を増やすことができ、地域包括ケアシステムの構築に大きく貢献できると考える。そのため、今後も事業を継続し、地域の神経難病療養者に対する在宅ケアの質向上を目指す。

本学学生を中心とした「きょうだい会」の設立

代 表 者：福田俊子*[1)]、泉谷朋子[1)]、梅田彩乃[1)]、丸山華奈[1)]
小出隆司[2)]、山口智子[2)]、伊藤さなえ[3)]、後藤晴香[4)]
[1)] 聖隷クリストファー大学、[2)] 浜松市浜松手をつなぐ育成会、
[3)] 浜松地区肢体不自由児親の会、[4)] NPO法人あくしす　あっとほーむ

【概要】

対人援助職の専門職養成を目的とした教育機関への入学を希望する学生の志望理由には、学生自身が病気やけがをした経験等に加え、障がいのある家族と共に暮らしてきた経験が大きく影響を与えていることが少なくない。本学社会福祉学部では、演習や実習科目における個別対応の際に、学生自身からこうした経験が語られることが多く、かねてより総学生数の１割程度がこれに該当するとの実感を抱いてきた。

かつて、筆者のゼミに所属し、障がいのある兄弟姉妹をもつ「きょうだい」である学生が、自分と同じ境遇にある者が、思春期、青年期以降にどのような生活課題を有しているかをテーマとした卒業論文に取り組んだことがある。その論文の冒頭で、「すぐ傍らにいる障がい者のきょうだいに自分たちが隠れてしまい、自分たちきょうだいには目を向けられてこなかったと感じている。私たちも支援が必要だった一人であり、目をむけられないといけない存在であると考えるようになった」と述べられているように、障がいのある本人や親とは異なった「生きづらさ」を抱えているにもかかわらず、特に思春期以降は殆ど誰にも話せなかったという経験をもつ「きょうだい」は少なくないと思われる。

大学生活では、職業選択を含む自らの人生の選択を意識することになる3年次から、「きょうだい」は「生きづらさ」と向き合うことを迫られることがある。しかし、学生が一人でこの作業を進めることは難しいため、同じ課題を抱える学生たちが自ら集まり、安心して語れる「仲間」とその「場」づくりの必要性を感じてきた。一方で、障がいをもつ子どものいる保護者からも、親には話せないことを自由に語れる場が必要であるとの声もよく聞かれている。そこで筆者らは、地域の当事者団体と連携しながら、本学の学生を中心とした「きょうだい会」の設立を目指した活動を展開することとした。

【目的・実施計画等】

1.目的

本事業では、本学学生を中心とした障がいのある人の「きょうだい」が、これまでに表出しづらかった体験や感情等を吟味すること、すなわち障がいをもつ兄弟姉妹や家族との関係の歴史を振り返ったり、現在あるいは将来に対して抱えている漠然とした心配や不安等について考えたりすることを通して、自己の強みを再認識したり、自分の生活課題を整理する機会を提供する「きょうだい会」を設立することを目的とした。

2.実施計画

今年度前半（4～9月）は、筆者らが支援しながら、本学学生のみを対象としたクローズのサポートグループとしての「きょうだい会」を開催し、後半（10～3月）には、地域の同じ課題を抱えるきょうだいも参加できるサポートグループの形成を計画した。

【結果】

1.4～9月の活動

1）　学生及び教員との打ち合わせ

協力者となっている学生を含む2名の学部生と教員2名で6月に打ち合わせを実施した。夏休み期間を利用した講演会の実施に向けた計画をたて、学生と教員間で役割を確認した。また、きょうだい会の設立の方向性

として、学生からは「きょうだい」という範囲を限定するのではなく、もう少し対象を拡げて「ヤングケアラー」も含んでサポートグループを形成してもよいのではないかとの意見が出された。

2）　講演会①の開催

9月10日（土）10:00～12:00、本学学生及び教員に対象を絞った講演会をハイブリッドにて開催した。参加者は4名。「○○さんのお姉さんとしてではなく、自分の人生を生きる」をテーマとし、本事業の協力者である後藤晴香氏による、幼稚園から小学校・中学校・高校、大学、そして社会人となったこれまでを、きょうだいという視点で振り返り、その経験を語っていただいた。

きょうだいのことを周囲に話せる時期と話せない時期があるなかで、大学入学後に、自分よりも年上のきょうだいの方々とお話しできる機会が一度だけあり、日常の些細な出来事を率直に話せたことがとても嬉しかったこと等と話して下さった。そして在校生に対して、「きょうだいを守りたい気持ちは大切にしつつも、それを優先しすぎない」ことや「自分のやりたいことを見つける」ことの大切さがメッセージとして伝えられ、講演は締めくくられた。

本講演の参加者からは、きょうだいに対してアンビバレントな感情をもつことは当たり前のことであることが確認できて安心したとの感想等が寄せられた。

２．10～3月の活動

1）　学生及び教員との打ち合わせ

講演会①の開催準備と同様、9月には、学部生及び教員それに10月に講演していただく沖侑香里氏にも加わっていただき、開催に向けての準備を整えた。学生からは講演会①を踏まえ、次回の講演会に対する要望等を出してもらいながら、テーマの最終的な調整を行った。

2）　講演会②の開催

静岡きょうだい会代表である沖氏による「病気や障がいがある方の『きょうだい』への支援の必要性とその事例」をテーマとし、10月29日（土）10:00～12:00にハイブリッドにて講演会を開催した。参加者は18名であった。

沖氏による講演は、3つの小テーマで構成された。1つは、「きょうだい」が抱える悩みについてである。「きょうだい」はその存在が主たる介助者や親の陰に隠れて見えにくいために、これまでに見過ごされることが多く、孤立しがちになるため、彼らが抱く「モヤモヤした気持ち」の根底には、不安、孤立感、罪悪感、プレッシャーといった複雑な感情がある。そして、病気や障害のある兄弟姉妹と過ごす時間が、「きょうだい」は親よりも圧倒的に長くなる等、その当事者としての経験を「時間軸」で捉えると、親の経験とは大きく異なるものとなる。したがって、「きょうだい」の周囲にいる大人は、このような認識をもって接することが大切になる。

2つは、ライフステージにおける「きょうだい」が抱えやすい悩みについてである。ご自身の体験も交えながら詳細に説明していただいた。彼らの悩みはライフステージごとに変化し、一生涯続く可能性があるため、周囲にいる者は長期的な視点をもってかかわることが必要となる。

3つは、対象を大人とこどもに大別される「きょうだい会」に関する社会資源の説明であった。全国の活動事例として「NPO法人しぶたね」や「きょうだい会SHAMS」、静岡こども病院等における院内の活動、大学生によるサークル等が紹介され、「居場所づくり」だけが支援活動なのではなく、様々な資源を巻き込みながら、「無理せずに自分たちのやりたいこと」を実現することを大切である。

そして、本講演の参加者からは、以下のような感想が寄せられた。

- きょうだい会をイメージすると、自身の辛い体験等を打ち明けるものを思い浮かべるが、決してそうではなく、強制されるものではないということを学びました。沖さんの「辛い時は無理に話をしなくていい。蓋をする時があってもいい。」という言葉は、すごく心に響いたし、今後の人生において、とても価値のあるものだと感じました。
- この度は貴重なお話が聞けて大変嬉しく思いました。障害児とそのきょうだいの両方を育てる身としては、どちらとも幸せな人生を歩んで欲しいと強く願っています。でも自分の身は1つで、1人にかかりきりになれないもどかしさに常に悩んでいました。

今回きょうだいとして育った沖さんの体験をお聞きして、心がグサグサと痛む瞬間がありました。でも沖さんが逞しく活動をなさってることや、具体的な支援の方法等を見せてくださったことで、我が子にも手を伸ばせば仲間や色々な選択肢があることを知ることができ、安心しました。保護者ときょうだい自身とでは障害児者を見る目線も違うことも気づきでした。家族それぞれがお互いの人生をよりよく生きることができるように、これからもたくさん考えていきたいと思います。静岡きょうだい会の今後の活動にも注目していきたいと思います。応援しています。

・今回初めて「きょうだい」の概念を知りました。ふだん対面している障害のあるご本人にも「きょうだい」がおられます。ついついご本人の支援者のひとりととらえてしまいますが、その存在に改めて気づかされました。
親御さんとは違う目線でご本人のことをとらえられていると感じる場面はこれまでもあり、講演を聞いた今では、それは違って当たり前で、さまざまな思いを超えられてきたのだと感じることができました。

その他、本講演会をきっかけとして、「きょうだい」をテーマに卒業研究を取り組むことを決める者が参加者のなかから生まれた。

【成果と課題】

障がいのある兄弟姉妹をもつ「きょうだい」を対象としたサポートグループの形成を目的とした講演会等を通じ、「きょうだい」には、親とは異なる生活課題や複雑な心情があること等を理解することができた。なかでも、講演会に参加した本学学生との振り返りにおいて、「きょうだい」は自分の体験を他者に語ること自体に大きな抵抗感を抱いていること等が語られたことから、当初予定していた「きょうだい会の設立」を目的としたサポートグループの形成は、教員主導で性急に行われるのではなく、在学生による自発的な活動への関与が生まれることを待ちながら、時間をかけて生成されることが重要であるとの認識をもつようになった。

また、講演会を企画・運営するなかで、主として小学生以下の「きょうだい」を対象とした支援を静岡県西部地区で展開されている「遠州こどもきょうだい会ミントモ」の代表者との交流がはじまり、先方より「シブリングサポーターの養成」を大学と共催したいという申し出をいただいた。「シブリングサポーター」とは、病気や障がいのある子どもの「きょうだい（sibling）」の応援団を意味する。次年度は、その養成講座の開催を検討したいと考えている。

こどもの感性と創造性を育む
五感をとおした美的経験によるアートプログラム開発

代 表 者：鈴木　光男（社会福祉学部）
協力者・連携機関：
坂田 芳乃（アルテ・プラーサ代表）
住　麻紀（アルテ・プラーサ　アーティスト）
松井　晃子（アルテ・プラーサ　アーティスト）
木村　由美子（三島市文化振興課 主幹）
渡部　碧唯（清水町社会教育推進係 主事）
藤田　雅也（静岡県立大学　准教授）
島口　直弥（浜松市美術館 指導主事）
筧　有子（浜松学院大学　准教授）

【経緯】

こどもは視覚、聴覚、触覚、味覚、臭覚といった五感を駆使して、自らの世界を認識し、さらに出会う世界を広げていく。DX化が進展する社会では、触れなくても触れたように感じる間接的な体験が増え、直接触ったり、聞いたりすることによる感覚を意識し、さらに磨く機会が減少している。目・耳・手に触れ感じたことを豊かに表現することで、こどもの感性と創造性はさらに磨かれていく。アートを軸に革新的な教育を展開するレッジョ・エミリアの幼児学校では、五感をもとに音・光・色・素材・香りに視点を当てた美的経験を組み込んでいる。このようなことから、県内各地で活用可能な「こどもの感性と創造性を育む美的経験によるアプローチ」に取り組み、こどもたちが遊ぶ感覚で美や美に類する価値を経験し、こどもならではの表現を展開する機会を創出したいと考え本事業に取り組んだものである。

【事業概要】

2021年アルテ・プラーサ（以下、アルテ）主催「見えないものをみる　水の音をかたちにしちゃおう」ワークショップ動画をベースに「感覚を活かしたこどもの表現活動としてのアートプログラム」を協力者とともに開発する研究会を設置し、事例を基にアートプログラムの開発とモデル事業を実施した。ここで得られた知見をもとに、2022年度はさらに県内各地域に根差した様々な美的経験を軸としたこども向けアートプログラムを開発し、アーティストや保育・教育関係者と共に実践しようとしたものである。

【期待される効果・成果】

触って、嗅いで、聞いて、見て等様々な感覚体験からイメージしたことを言語化したり、表現したりすることで、身体をとおした美的経験として蓄積され、いつしか学びとなって、こどもたちならではの感性や創造性、思考力・判断力・表現力を育てアートの視点を活かした幼児教育・初等教育の実践が可能になろう。県内東部・中部・西部各地での「美的経験によるアートプログラム」のモデルとなり、障がいのあるなしに関係なく全ての教育・保育現場での活用に大いに寄与するものと考える。

【実施方法】（表 1）

アルテのワークショップを軸に、それぞれのアーティストや専門家による企画を実施し、代表者・協力者全員による事前・事後の研究会を開催し、企画検討や参与観察記録・振り返りを共有しアートプログラムを開発する。また、近隣の学校教育現場にてアーティストとこどもを出会うようにし、協働して学習活動や事業を展開する等もした。

表1　本事業に関わる主な活動一覧

※表中「アルテ」はアルテ・プラーサ関連の事業、「学校連携」はそれ以外の近隣の学校と連携した事業を意味する。

No	開催日	内容	備考
1	5月16日 6月27日	アルテ①：「みえないものをみる 水の音をかたちにしちゃおう」（2021年開催）ワークショップ動画からアートプログラム化を図るための課題等を抽出	Zoom
2	5月24日	学校連携①：みをつくし特別支援学校シャッターアート打合せ（造形作家 鈴木海斗 氏・有限会社宣美代表取締役 内山将 氏）	現地・対面
3	8月25日	アルテ②：10月ワークショップ事前現地打合せ	現地・対面
4	10月16日	アルテ③：触覚をとおした美的経験によるアートワークショップ「アート寺子屋『みて、きいて、さわって、つくっちゃおう』」開催	現地・対面
5	11月2日	アルテ④：10月ワークショップ事後研究会（振り返り）	Zoom
6	11月9日	学校連携②：磐田第一中学校合唱コンクール 歌唱披露（メゾソプラノ歌手 本多厚美 氏）	現地・対面
7	12～1月	アルテ⑤：聖隷社会福祉学会誌 論文執筆	メール審議

【実施報告】

1. アルテ関連

1-1 アート寺子屋「みて、きいて、さわって、つくっちゃおう」実施概要

アルテに関しては、2022年10月16日の「アート寺子屋『みて、きいて、さわって、つくっちゃおう』」がメイン事業であった（写真1。チラシ参照）。この事業前後でオンラインや現地での打ち合わせを重ね、当日を迎えた。以下、当日の実施概要である。「第一部」はジュリアーノ・ヴァンジ作品の鑑賞、「第二部」は石を素材としたワークショップとなっている。

①タイトル：アート寺子屋「みて、きいて、さわって、つくっちゃおう」
②開催日時：2022年10月16 日（日）10:00 ～ 16:00
③会場：ヴァンジ彫刻庭園美術館 屋外庭園
【第一部】講師：渡川智子（ヴァンジ彫刻庭園美術館学芸員）
ヴァンジ彫刻庭園美術館屋外彫刻作品4 点の触察と鑑賞ワークショップ（視覚と触覚を活用する《触察と鑑賞》による身体のさまざまな部位を使った作品鑑賞）
【第二部】講師：藤田雅也（石の彫刻家・静岡県立大学短期大学部こども学科准教授）
《出会い》《対話》《共有》をテーマにした石を素材としたワークショップ（一連の活動を通じて、参加者自身が素材である板材、玉石等に出会い、様々な探索・探求により自らの表現を考えるワークショップ）

写真1　チラシ

1-2 【第一部】ヴァンジ作品鑑賞概要

ワークショップの導入として、ジュリアーノ・ヴァンジ Giuliano Vangi（1931～）の彫刻作品を鑑賞した。鑑賞した作品は以下の4点である。

・《層になった木を眺める人物》1993年（図1）
・《くつろぐ男》1993年（図2）
・《顔に手をやる女》1994年（図3）
・《後ろ手に立つ人物》1994年（図4）

図1 層になった木を眺める人物

図3 顔に手をやる女

図4 後ろ手に立つ人物

図2 くつろぐ男

1-3 【第二部】石を素材としたワークショップ概要

第二部のワークショップでは、《出会い》《対話》《共有》の3つの出来事の往還によって、自分なりの見方や感じ方、考え方を働かせながら、表現したり鑑賞したりする活動を展開した。図5は、ワークショップにおける3つの出来事の模式図である。

1-3-1 《出会い》11時～12時

①講師自己紹介と活動の流れの説明
②講師が制作した石の彫刻作品を探す
③講師が制作した石の彫刻作品を触りながら鑑賞する
④「素材」（材料・道具・技法）の紹介
　・材料：御影石・大理石等の板材、小石（玉砂利）等
　・道具：鑿、ハンマー、ゴーグル、砥石、耐水ペーパー、石材用接着剤等
　・描画材：クレヨン、絵の具、油性マーカー等
⑤行為や表現技法の紹介と実演
　・積む、並べる、割る、削る、磨く、描く、塗る、接着する等

1-3-2 《対話》13時～15時 ※こどものみ参加

①やってみたい行為や表現技法に取り組む
②お気に入りの石を探す
③どんな表現をしてみたいか考える
④他者や素材、環境との対話を通して、自分なりの行為や表現に挑戦する

図5 3つの出来事の模式図
【藤田作成】

1-3-3　《共有》15時～16時

①自分の作品等について「紹介カード」記入
②自分の作品等と「紹介カード」を好きな場所に展示
③自分の作品等についての話をする（希望者のみ）、話を聞く（全員）
④自他の作品等を自由に鑑賞
⑤他者（こども・講師・保護者等）と交流
⑥活動の振り返り

1-3-4　活動中のこどもの姿

（1）《出会い》によるこどもの姿

用意された「素材」（材料・道具・技法）と出会い、「積む」、「並べる」、「割る」、「削る」、「磨く」、「描く」、「塗る」、「接着する」等さまざまな行為に興味を持ち、活動を展開し、イメージを広げていこうとする様子が見られた。

（2）《対話》によるこどもの姿

こどもたちは、「環境」や「素材」との《出会い》を通してさまざまな行為に興味を抱き、「他者」との関わりによって自分なりの表現を展開していこうとする姿が見られた。

（3）《共有》によるこどもの姿

図6～11は、こどもたちが展示した作品等である。

図6　石を積む行為から生まれた風景

図7　石を割る行為から生まれた表現

図8　石を塗る行為から生まれた宝石

図9　石を並べる行為から生まれた文字

図10　石に描く行為から生まれた表現

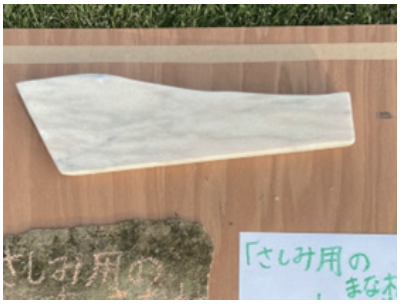

図11　石を磨く行為から生まれた器

2. 学校連携

2-1 静岡県立浜松みをつくし特別支援学校シャッターアート概要

静岡県立浜松みをつくし特別支援学校は、本学から10分ほどのところにある2021年度に開校したばかりの小学部から高等部までの特別支援学校である。体育館と倉庫それぞれのシャッターを使ったアート活動を展開したいという相談を受け、磐田市の造形作家 鈴木海斗氏と、有限会社 宣美代表取締役 内山将氏に依頼し、このシャッターアートの活動を展開し始めた。2022年度はこどもたちや先生たちの願いを集約し、アイデアスケッチをもとに鈴木海斗氏がデザイン案を作成するところまで進めることができた。2023年度には具体的に作業を進め、完成を目指す方向で計画を練っている段階である。図12は、こどもたちのアイデアをもとに鈴木海斗氏が作成したデザイン案である。

2-2 磐田市立磐田第一中学校合唱コンクール 歌唱披露概要

2022年11月9日、磐田市民文化会館「かたりあ」にメゾソプラノ歌手 本多厚美氏を招き、生徒たちに歌声を披露していただいた。本多氏は浜松市やらまいか大使・静岡県ふじのくに観光大使を務める世界で活躍してきた方であり、歌唱指導に関する本多メソッドを開発もしている。

この磐田第一中学校だけでなく、磐田中部小学校や浜松市立萩丘小学校でも歌唱指導を実施していただいた。

図12 シャッターアートデザイン案

【事業の成果と課題】

保護者からは、参加したこどもたちの満足感のもとになった「何もつくらなくてもいい」という「寄り添う大人」の構えを評価された。普段の学校生活等で「いいことを発表する」あるいは「上手につくる」という意識が知らず知らずのうちに醸成され、こどもの感性や創造性に蓋をしてしまっているところがある。今回のような対話型の鑑賞や石という素材に身体を通して関わり、その行為そのものの意味を省察していくことが、アートプログラムを開発していく上では重要な視点であろう。これは学校連携事業においても同様である。このような視点が明らかになった点が何よりの成果と言える。

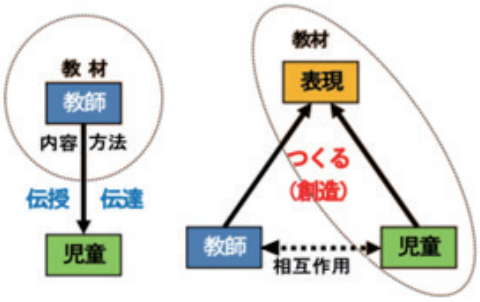

図13 伝授型と創造型の学習モデル
（佐伯「双原因性感覚」をもとに鈴木作成）

図13は伝授・伝達型の学習モデルと、佐伯の「双原因性感覚」に立った創造的な学習モデルを筆者なりに作図したものである。造形ワークショップの内容よりも、アートプログラムの進め方よりも、先ずは大人とこどもが相互作用し合う関係性になることを大切にして今後のアートプログラムやワークショップの展開をしていく所存である。

地域包括ケアシステムにおける社会資源アプリの開発

代 表 者：矢倉　千昭（リハビリテーション学部理学療法学科）
連携機関：前田知恵美（地域包括支援センター細江）
杉山　岳弘（静岡大学情報学部情報社会学科）
鈴木　博（浜松市高齢者福祉課）

【2021 年度までの取り組み】

代表者の矢倉千昭（聖隷クリストファー大学）は前田知恵美所長（地域包括支援センター細江）よりサービス提供圏域の地域在住高齢者に必要な社会資源をパソコンやタブレット、スマートフォンで調べることができるアプリ開発ができないかと相談を受けた。静岡大学の杉山岳弘教授（静岡大学情報学部）の協力を得て、2020年度より、社会資源アプリの開発がスタートし、アドバイザーとして浜松市高齢者福祉課の協力を得た。

2020年度は、浜松市北区引佐町を対象地域とする『いなさで暮らそうマップ』（https://www.sugilab.net/inasa-map/index.html）を作成、社会資源アプリの有用性についてケアマネージャーにアンケートを実施・検証を行い、引佐地区社会福祉協議会の広報で住民に紹介されている。2021年度は、細江町を対象地域とする『細江で暮らそうマップ』（https://www.sugilab.net/hosoe-map/index.html）を作成している。社会資源アプリは、商店、医療機関、飲食店、サロン、介護サービス、障がいサービス、ボランティア、バス停の情報をパソコンやタブレット、スマートフォンで検索することができる。引佐地区、細江地区のケアマネージャーを中心に社会資源アプリが活用されている。

【本事業の目的（2022 年度）】

2022年度は、三ケ日町を対象地域とする『三ケ日で暮らそうマップ』を開発することになっており、地域包括支援センター細江のサービス提供圏域の社会資源アプリ開発は完成となる。しかし、サービス提供圏域における社会資源アプリの認知度は低く、また社会資源の情報をさらに充実する必要があった。引佐町、細江町、三ケ日町の地域住民に対する情報提供として紙ベースのマップを作製し、配布することで社会資源アプリの認知を高める。さらに、将来的に地域からの協力を得られることで、マップ情報を充実させることも目指している。

【実施方法】

① 組織

地域包括支援センター細江、静岡大学、聖隷クリストファー大学、浜松市による産官学連携事業モデルとして位置づけられる。

② 方法

地域包括支援センターは、社会資源アプリ開発の全体統括し、対象地域の情報収集を担当した。矢倉ゼミ（聖隷クリストファー大学）の卒研ゼミ生が中心となり、地域包括支援センターからの情報を受け、また追加の情報収集を行い、アプリに必要な情報をグーグルスプレッドシートに入力した。杉山ゼミ（静岡大学）の卒研ゼミ生がアプリ開発を担当した。社会資源アプリ開発の打合せは、月1回オンラインにて開催し、浜松市はオブザーバーとして打合せに参加して必要に応じてアドバイスしていただいた。

社会資源アプリ『三ケ日で暮らそうマップ』の開発中、これまで作成してきた『いなさで暮らそうマップ』、『細江で暮らそうマップ』と整合性を確認し、それぞれのアプリが見られるようにした。

続いて、QRコード使って社会資源アプリから検索することができる紙マップ冊子を作成に取り掛かった。紙マップ冊子は、引佐町、細江町、三ケ日町の主要な地図に社会資源を示すアイコンと社会資源の属性のQRコードを載せた。QRコードで分類された社会資源の属性は、商店、医療機関、飲食店、サロン、介護サービス、障がい

サービス、バス停の7つとし、タブレット、スマートフォンでQRコードを読み取ることで属性の情報を閲覧することができるようにした。

紙マップ冊子の作成は23年2月に完成し、3月にケアマネージャーに対する説明会を行った。

【結果・考察】

社会資源アプリ『いなさで暮らそうマップ』、『細江で暮らそうマップ』、『三ケ日で暮らそうマップ』は図1のQRコードで示す。QRコードをタブレットやスマートフォンで読み込むことで実際に使用することができる。社会資源アプリのホームページは図2に示す。また、紙マップ冊子は図3に示す。

図1. 社会資源アプリのQRコード

a. いなさで暮らそうマップ　　b. 細江で暮らそうマップ　　c. 三ケ日で暮らそうマップ

図2. 社会資源アプリのホームページ

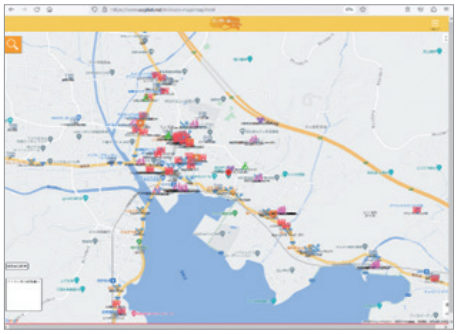

図3. 紙マップ冊子

2023年3月10日、杉山ゼミ生（静岡大学）が、地域包括支援センター細江において、地域包括支援センター圏域の主任ケアマネージャー7人が対面参加、市内の地域包括支援センターの5施設がオンライン参加で、社会資源アプリと紙マップ冊子の説明会を行った。

今後は、引佐町、細江町、三ケ日町の住民に対し、広報誌で周知するとともに、回覧板等を用いて紙マップ冊子を配布する。また、区役所や地区社会福祉協議会、地域包括支援センター等にも設置し、転入者、サービス提供圏域外に住んでいる家族に配布する予定である。

地域在住の高齢者や家族、ケアマネージャー、地域包括支援センター、地区社会福祉協議会が社会資源アプリを活用することで、地域在住の高齢者が地域生活、医療サービスや介護サービスの提供が充実することが期待される。

【まとめ】

本事業は地域包括支援センター細江からの相談から始まり、地域包括支援センター、静岡大学、浜松市との産官学連携による社会資源アプリ開発、その集大成として紙マップ冊子の作成に関わることができた。また、卒研ゼミ生は、アプリ開発を通じて、地域社会に対する貢献と、他大学のゼミ生との連携協働を学ぶことができた。また、本事業がきっかけとなり、『地域理学療法学の実践』の科目において、企業等との連携型授業として、5つの地域包括支援センターから地域課題を受け、学生が課題解決を検討し、それぞれの地域包括支援センターに解決策を提案する授業を実施している。

本事業は2022年度で終了となったが、新たな地域社会に対する貢献事業に携わる機会があれば、学生の課題解決力を高める実践的な教育の構築を検討していきたい。

保育場面における感覚統合理論を基盤とした遊びの実践

代 表 者：伊藤　信寿（リハビリテーション学部）
連携機関：宇野　富子
（社会福祉法人住吉会　幼保連携型認定こども園　小豆餅ゆすらうめこども園）

【はじめに】

現在は子どもを取り巻く環境が大きく変化している。国土交通省（2013）が行った「都市公園及びその他の公園における遊戯施設等の設置状況」調査によると、ゆりかご型ブランコや、回転塔、シーソー等動きのある遊具が顕著に減少している。その背景には、老朽化以外に、多くの子どもがそれらの遊具でけがをしていることが大きな原因となっている。動きのある遊具は子どもの神経系の発達を促し、調整力を培うには最良の遊具であると述べている（文科省運動指針、2012）。しかし、事故も多く、設置者の責任問題に発展するケースもあり難しい問題であり、2002年には文部科学省からの告知・通達もあり幼稚園や小学校からも姿を消している。

そのため、今回は感覚統合理論（Ayres, 1972）（以下SI）を基盤とした室内で安全に行える運動プログラムを企画・実践することを目的とした。

【方法】

1）　対象

協力園である小豆餅ゆすらうめこども園の年長クラスの20名である。

2）　方法

場所：小豆餅ゆすらうめこども園の多目的室

内容：こども園の園児に対しSIを基盤とした遊びを実施

提供者：代表者と学生ボランティア4名

実施期間：2023年2月と3月に1回の計2回実施。

3）　感覚統合理論

SIは自分自身の身体の情報や周囲の情報（感覚刺激）を上手く整理して取り入れることが苦手で、混乱している方に対して、遊具や様々な感触を得られる玩具等を使用して、感覚情報を上手く整理して適応行動を引き起こすことを目的とした療法である。例えば、光や音に非常に過敏なため、過剰に反応し落ち着きをなくしてしまう子どもや、触覚が非常に過敏なため、物に触れない、人との接触を避けるような過剰な防衛反応を示す子ども、逆に触覚が鈍麻なために、ボタンや紐の感触がわかりにくく、上手くボタンをはめられない、靴ひもを結べないといった不器用な子ども。あるいは、高さやスピードに対して非常に鈍麻なため、高所のような危険な場所に行きたがったり、過剰に動き回る子ども等、感覚刺激に対して過剰に過敏あるいは鈍麻なために、問題行動を引き起こしている子どもが少なくない。このような子どもに対して、遊具等を使用して遊びの中で楽しめる感覚を提供することにより、子どもの感覚情報処理機能の成熟を促し、苦手な部分を育てていくことを目的としたものがSIである。

また、SIは発達障害や診断はないが支援が必要な子どもへの治療として効果が立証されている（岩永ら、2014）。

【結果】

1） 参加者

年長クラス20名が参加した。

2） 実施内容

下記の活動を30分程度実施した。

① スクーターボード

主に前庭感覚刺激や固有受容覚刺激が入り、姿勢やバランスの発達に影響する。

② 毛布そり

主に前庭感覚刺激や触覚刺激が入り、姿勢やバランス、身体図式の発達に影響する。

③ 毛布ブランコ

主に前庭感覚刺激や触覚刺激、圧迫刺激が入り、姿勢やバランスの発達や、情緒面の安定等に影響する。

④ オタマを使ってボール運び

力加減や移動のスピード調整等、運動コントロールの発達に影響する。

3） 園児の様子

遊びの内容は、初めての体験の園児が多く、怖がる園児もいたが、保育士や学生と一緒に乗ることで、徐々に慣れていった。また、運動能力や運動企画を要しない遊びであったため、園児も楽しく参加していた。しかし、特に前庭感覚刺激が苦手な園児もおり、刺激の強度や大人が抱っこして乗る等の工夫が必要であった。

4） 保育士の様子

保育士にも入っていただき、遊びの体験を通して、刺激となる感覚を感じてもらった。

粗大運動やスピード、バランスを要する遊びが苦手な保育士もおり、刺激の感じ方（過敏や鈍磨）により、園児に提供する遊びも異なるため、良い体験になったと感想をいただいた。

【考察・結論】

現在は子どもを取り巻く環境が大きく変化している。国土交通省（2013）が行った「都市公園及びその他の公園における遊戯施設等の設置状況」調査によると、ゆりかご型ブランコや、回転塔、シーソー等動きのある遊具が顕著に減少している。その背景には、老朽化以外に、多くの子どもがそれらの遊具でけがをしていることが大きな原因となっている。動きのある遊具は子どもの神経系の発達を促し、調整力を培うには最良の遊具であると述べている（文科省運動指針、2012）。しかし、事故も多く、設置者の責任問題に発展するケースもあり難しい問題であり、2002年には文部科学省からの告知・通達もあり幼稚園や小学校からも姿を消している。

日本スポーツ振興センター（208）の調査によると、全国の幼稚園・保育園で子どもが、けがをしたケースの半数以上は、頭部や顔のけがである。それらの原因は運動経験が不足していることも要因の1つであると報告している。また、文部科学省（2011）によると3年間にわたり、全国21市町村で体力の向上への基礎づくりを行った実践園と、意図的に行わなかった協力園での幼児の生活習慣・運動習慣の確立及び体力の向上等の調査を行った。その中で、幼児の身体的な体力と、精神力及び社会性との深い関係性が報告されている。このように、幼児期における運動は、身体面の発達のみでなく、精神面や社会性における発達にも影響を与えると考えられる。

【今後】

園の協力を得て、園で行える運動面、精神面や社会性の発達を促すことを目的としたプログラムを作成する。それと同時に、保育士に対しSIを基盤とした子どもの発達の視点に関する勉強会を開催し、子どもの運動面、精神面、社会性における理解を深める。さらに、考案したプログラムを実践し、その効果についての研究に繋げる。

発達障がい児に対する余暇活動の実施

代 表 者：伊藤信寿（リハビリテーション学部）
連携機関：伊藤陽香（NPO法人むく　多機能型事業所むく）
大野実沙紀（NPO法人むく　多機能型事業所むく）
田村萌弥（NPO法人むく　多機能型事業所むく）
牧　春奈（NPO法人むく　多機能型事業所むく）

【はじめに】

障がいのある子どもは、自ら余暇を自己選択して取り組むことが難しく、保護者の負担も大きい。余暇は、QOLの構成要素として中核指標の一つであることがSchlackら（2002）に示されている。しかし、近年増加している発達障害のある子どもや成人においては余暇の乏しさが多く報告されている。

浜松市においても例外ではなく、浜松市における発達障がい児への支援は、専門機関が少なく、特に児童期から青年期での支援方法は確立されておらず、その対応は緊急な課題である。実際に浜松市在中の発達障がい児の保護者は、幼少期においては支援が比較的に多くあるが、就学期以降は支援がなく、困っているということを多く訴えている。このように発達障害児あるいは、グレーゾーンの子どもに対する量と質における支援の不足により、孤独な保護者、関わりが薄い親子関係等の課題に対する取り組み、地域社会が子どもを取り巻く支援に関心や理解を深め、地域が協働しながら、支えていくことが必要と考える。

このような状況を踏まえ、今回の目的は、障害のある子どもに対し、様々な余暇活動を提供し、子ども一人一人のニーズに合い、継続可能な余暇活動を見つけることに繋がることを目的とする。

【方法】

1）　対象

多機能型事業所むくを利用している小学生から高校生の発達障がい、あるいは支援を必要とする子ども。

2）　余暇活動の内容

革細工、陶芸、木工、手工芸、絵画、スポーツ、料理を提供

3）　余暇活動の実施

場所:多機能型事業所むく

活動日:平日の学校終了後に多機能型事業所むくを利用する日

活動参加:活動内容を提供し、子どもがやりたい活動を選択

4）　期間

2023年2月13日～2023年3月31日

5）　アンケート調査

口頭による回答が可能な子どもに対して、活動に参加したアンケート調査を実施した。

【結果】

1）　参加者

多機能型事業所むくの放課後等デイサービス事業に登録している32名だった。年齢等の内訳は表1のとおりである。

表1　参加者数

	小学生低学年	小学生高学年	中学生	高校生
特別支援学校	3名	4名	4名	8名
特別支援学級	6名	4名	0名	0名
通常級	0名	2名	0名	1名

2）　活動への参加人数（延べ数）

各活動に参加した人数は表2の通りである。複数参加あり。

表2　活動に参加した人数

	革細工	陶芸	木工	手工芸	絵画	スポーツ	料理
特別支援学校	10名	14名	2名	0名	2名	2名	14名
特別支援学級	5名	8名	1名	0名	1名	1名	10名
通常級	1名	1名	0名	0名	0名	1名	1名

革細工、陶芸、料理においては、年齢や知的レベル等に関係なく、多くの参加者がおり、継続的に参加していた。参加者の4名については強度行動障害と判定されているが、革細工や陶芸に参加し、活動中は笑顔もみられ穏やかな様子で行っていた。

3）　アンケート結果

アンケートは、口頭で答えられる14名から回答を得た。質問内容は、①どの活動が楽しかったか、②またこのような活動をしたいか、③今後やってみたい活動はあるかの3つであった。アンケート結果は下記の通りである。

表3　アンケート結果

①どの活動が楽しかったか	料理10名、革細工5名、陶芸5名、木工2名
②またこのような活動をしたいか	したいと回答14名
③今後やってみたい活動はあるか	料理10名、サイクリング5名、乗馬3名、菜園3名

【考察・結論】

Orsmondら（2004）は、自閉症スペクトラム症の10歳から21歳までの185名、22歳から47歳までの50名の母親に対し、本人の仲間関係、社会的、余暇的活動への参加に関する面接と質問紙調査を行い、全体のほぼ半数には同年代の活動をともにする互恵的・相補的な関係がなかったことを明らかにしている。また、津上ら（200）の調査によると家庭内での余暇の過ごし方として「母親と一緒にテレビやビデオを観て過ごすことが多い」こと、さらに家の外での主な過ごし方については保護者との「スーパー等への買い物」や「ドライブ」が多いこと等が報告されている。以上のことから、障害のある子どもたちは積極的に外で活動することが少なく、余暇を受動的に家族と過ごしていることが示唆されている。

また、4名の強度行動障害の生徒において、活動を通して穏やかに過ごすことができていた。人を叩く、噛む、あるいは自分の頭を叩くというような行動は、問題行動という捉え方ではなく、何かに困っているサインであると捉えることが重要であると同時に、その子に合った活動を見出すことが重要である。子どもに合った活動を見出すための一つの手段として、その子の好きな感覚刺激は何かを考えることがある。今回提供した革細工の木槌で刻

印を打つ、陶芸で粘土をこねる活動を通して、子どもの好きな固有受容覚刺激が得られたと考えられる。一人一人の子どもに合った余暇活動は、子どもの情緒面の安定にも効果があると考えられる。

今回の事業のように地域における余暇活動支援を実施することにより、多種多様な子どもや保護者のニーズに応える機会となり、より広範囲の年齢層の多くの発達障害の子どもたちと、その家族への支援が可能となる。特に本大学が位置する浜松市における就学後の発達障害児とその家族に対する支援は非常に手薄であるため、この地域連携事業が浜松市における発達支援の拠点になる可能性があると考えられる。さらに発達障がい児の余暇活動あるいは居場所の提供により、二次障害としての問題行動や不登校、ひきこもり、虐待のリスクが低くなることが期待できる。

作業経験の自分史が高齢者に与える効果の探索的研究

代 表 者：鈴木　達也（リハビリテーション学部）
連携機関：浜松北地域まちづくり協議会

【目的】

本事業は作業経験の自分史を作成するプログラムが高齢者にどのような影響を与えるのかを心理面、生活面、QOLの側面から明らかにすることである。作業療法学科の高齢期作業療法演習では2018年から近隣施設の協力を得て自分史作成プログラムを行っている。自分史は回想法的な効果があり、高齢者がこれまでの人生を振り返り前向きに生きることに繋がるため介護福祉分野で取り入れられている。演習に協力していただいた参加者からは「参加してよかった」等喜びの感想が聞かれていた。しかし、その効果については明らかではなく作業療法としての特徴も不明確であった。今回、対象者が価値を持って行ってきた生活行為である作業に焦点を当てた自分史を作成することで、参加者にどのような効果があるのか心理面、生活面、QOL面から分析し、その効果と課題を明らかにすることを目的に実施した。

【方法】

浜松北地域まちづくり協議会との協働で地域住民を対象とした自分史作成プログラムを実施する。プログラムに参加した人を研究候補者として、書面・及び口頭で研究者から説明を行い同意が得られたものを研究対象者とした。プログラムは2回構成で実施し、1回目はライフヒストリーカルテを使用した人生経験の聞き取りと価値を持って行ってきた作業の焦点化に向けたインタビュー。2回目は学生ボランティアとの自分史を作成した。

- **プログラム全体の事前事後評価**

  研究対象者に対しプログラム前後に日常生活の活動度を知るためのFAI（Frenchay Activities Index）、QOL評価である生活満足度LSI-Z（Wood, 1969）、生きがい評価のIkigai-9（今井, 2012）の回答を得た。

- **プログラム毎の前事後評価**

  1回目・2回目の各プログラム前後で気分評価のPOMS2短縮版を行いプログラムが与える心理面への変化を測定する。

- **プログラム実施事後評価**

  プログラム終了後に自分史プログラムへの参加理由、自分史作成を行ってみての感想や、どのように使っているか等について自由記述式のアンケートを渡して1週間の時間をおいて郵送で回答を得た。

  なお本事業は聖隷クリストファー大学倫理委員会（承認番号22033）の承認を得て行った。

【結果】

研究協力者は男性5名、女性6名の11名であった。その内女性1名は2回目のプログラムに不参加となったため、男性5名、女性5名の計10名を研究対象者として分析した。プログラム前後で、FAI、LSI-Z、Ikigai-9に有意な変化は見られなかった（表1）。

一方でPOMS-2 短縮版は全体的に良好な変化が見られており（表2）、インタビュー中心の1回目ではF（友好）の増加とTMDの減少に有意な変化（$p<0.05$）が見られた。自分史作成の2回目ではDD（抑うつ―落ち込み）、FI（疲労―無気力）に有意な減少（$p<0.05$）が見られた。

表1：プログラム全体の比較

	FAI	LSI-Z	ikigai-9
1回目	34.2（±4.6）	8.9（±3.0）	37.4（±4.9）
2回目	34.1（±3.1）	9.9（+2.0）	36.8（±4.9）

自由記述式の回答では参加理由について、「もともと興味があった」、「自分の人生を振り返り整理したい」、「子孫に残したい」という回答が多かった。自分史作成の感想については「学生が話を聞いてくれたこと」を述べる参加者が多く、「自己を振り返る機会になった」と回答が得られた。自分史作成後の変化として、「特に変わりがない」と回答した者もいる一方で、「今後を精一杯生きたい」、「自分史に書けることをやっていきたい」、「これまでは家族のことを優先していたが自分のことを優先してやってみようと思うようになった」等の回答が得られた。

また本プログラムに参加した学生からは「お話を聴くのが楽しかった」、「自分の知らないことを聴くことができた」、「コミュニケーションを学ぶ機会になった。」等の前向きな感想が得られた。

インタビューの様子

表2：プログラムごとのPOSM2短縮版の平均値の比較（Mann-whitheyのu検定）

	怒り敵意 AH	混乱当惑 CB	抑うつ落ち込み DD	疲労無気力 FI	緊張不安 TA	活気活力 VA	友好 F	TMD
8月プログラム前	2.45	4.45	2.27	2.45	4.00	11.64	12.55	4.00
8月プログラム後	0.64	2.18	1.36	1.55	1.64	13.55	14.73	-6.18
P値	0.11	0.09	0.06	0.11	0.06	0.09	0.05	0.01

	怒り敵意 AH	混乱当惑 CB	抑うつ落ち込み DD	疲労無気力 FI	緊張不安 TA	活気活力 VA	友好 F	TMD
9月プログラム前	1.90	3.30	3.20	3.10	4.50	12.30	12.80	3.70
9月プログラム後	1.20	2.40	1.60	1.30	3.40	13.20	13.40	-3.30
P値	0.41	0.35	0.02	0.02	0.33	0.28	0.20	0.11

【考察】

各回のプログラムでPOMS2短縮版の回答に有意な変化が見られた。インタビュー中心の1回目では学生との交流もありF（友好）の向上と、人生経験を語ることでTMDが減少したと思われる。自分史作成の2回目では作業に焦点を当てた自分史が完成することで人生を前向きに振り返ることでDD（抑うつ―落ち込み）、FI（疲労―無気力）に有意な減少が見られたと考えられる。自分史作成が生きがい感に変化を与えた報告があるが（古角ら, 2021）今回は自分史作成ではいきがい感等には変化は見られなかった。

スタッフとして参加した学生からは、対象者の話を伺うことが、コミュニケーションの機会や人の人生に耳を傾けることへの興味が増した等の回答が得られた。対象者と関わることで学びの機会につながるプログラムになったのではないかと考えられる。

今回のプログラムを踏まえ、今後、作業に焦点を当てた自分史作成が参加者の生活に良い影響を与えられるようプログラムを改善していく。

対象者と相談し自分史を作成

対象者と相談し自分史を作成

【連携の成果】

2023年4月1～30日の期間、浜松市立都田図書館展示コーナーで本事業の活動報告を浜松北地域まちづくり協議会と協働で展示した。参加者にも協力を得て完成した自分史も展示させて頂き、地域住民に活動内容と自分史の効果について知って頂く機会となった。2023年度は今年度の活動を踏まえて発展・継続していく予定である。

都田図書館展示コーナーで報告書を掲示

リハビリテーション学部における産学連携による教育・実践モデルの構築

代 表 者：飯田妙子（リハビリテーション学部作業療法学科・産学連携推進リーダー）
分 担 者：新宮尚人（リハビリテーション学部長）
柴本　勇（リハビリテーション科学研究科長）
矢倉千昭（理学療法学科）、泉 良太（作業療法学科）
佐藤豊展（言語聴覚学科）
連携機関：尾上智彦、長嶋桃子、酒井英彰、波多江早織（杏林堂薬局）
協 力 者：藤田さより（リハビリテーション学部教務委員長、作業療法学科）
栗田洋平（作業療法学科）、佐藤綾華（言語聴覚学科）
リハビリテーション学部作業療法学科・言語聴覚学科学生

【2021 年度までの産学連携にかかる取り組み】

2019年度よりリハビリテーション学部事業計画の基盤整備として、学部の産学連携推進を開始した。学部教員はじめ、他大学における企業との連携状況について調査した上で、本学では在学生が「地域における健康促進・疾病予防に関する学び」を主体的に取り組める機会の構築・発展を目的に、産学連携事業を展開することとした。

2020年度より具体的な活動を開始し、2021年度までに「心と身体の健康」をテーマにしたYouTube動画の作成・配信やオンライン運動教室、湖西市店舗での身体機能・認知機能に関する健康教室を実施している。

【本事業の目的（2022 年度）】

企業との連携事業を通して、リハビリテーション学部および各学科の専門性を地域に提供し、健康促進・疾病予防等の地域密着型支援を行う。特に、コロナ禍における外出自粛による運動・活動量の減少、メンタルヘルスの問題や子育て支援、高齢者の健康支援に着目し、地域のニーズに即した専門知識・活動を提供することにより、地元住民や企業の課題解決の一助となると考える。

また、学生主体によるアクティブラーニングの形で行うことで、新しい教育・実践のモデルの構築を図っていく。本事業を行うことで学生の更なる学びにつながるだけではなく、企業や地域に本学並びにリハビリテーション専門職について実際に知っていただく広報活動の役割を担うことになり、学生募集や将来的には新しい領域（企業）への就職や新たな連携の可能性につなげていけるのではないかと考える。

【実施方法】

①企業・学生・教員による連携事業の実施

2021年度より湖西市で実施されているBaaS事業実証実験（注1）に参加し、杏林堂薬局店舗にて「測定」を中心とした体験型イベントを学生主体で開催した。イベント後には、学生のアクティブラーニングの教育効果を測るため、アンケートを実施した。

②新たな連携の可能性の検討

現在までに実施した動画作成、店舗イベント以外の形での連携の可能性を検討するため、杏林堂薬局にて実施されているその他の事業について情報共有、視察等を行なった。

【実施報告】

①企業・学生・教員による連携事業の実施

・店舗イベントの実施

湖西市のBaaS事業実証実験を利用、もしくは買い物のため杏林堂薬局店舗を訪れた地域高齢者を対象に、「測定」を中心とした体験型イベントを3回実施した。測定結果についてフィードバックし、家で実施できる予防法を指導、日常生活に生かしていただけるよう資料を配布した。イベントには実証実験を担当されている湖西市役所都市計画課職員も来訪され、内容やリハビリテーション専門職の専門性、一次予防の必要性についての情報共有も行った。

当初、リハ学部全学科の実施を予定していたが、授業等のスケジュールの都合上、2学科での実施となった。

＜開催実績＞

	学科	内容	参加者
2022年9月9日	言語聴覚学科 学生4名、教員2名	①高次脳機能 ②口腔運動 ③発話 ④家での予防法の指導	12名
9月28日	作業療法学科 学生5名、教員2名	①自己評価式抑うつ性尺度 ②生きがい意識尺度 ③興味関心チェックリスト ④日常生活のQOLの維持・向上のためのアドバイス	13名 湖西市役所 都市計画課職員
11月16日	作業療法学科 学生4名、教員2名	①～③は前回同様 ④のみ、前回とは別の資料を使用	9名 湖西市役所 都市計画課職員

＜イベント参加者の感想＞

本イベントに昨年度より参加されている市民の方の感想について、湖西市担当者より伺うことができた。

- コロナの影響で地域の集まりが減ったため、このような機会をきっかけに集まることができて楽しい
- コロナ禍で外出が減ったため、自分の健康を確認する良い機会になっている
- 今までやったことのない検査が多く、面白いと感じている

＜参加学生の感想（教育効果の測定結果）＞

本イベントに参加した学生11名にアクティブラーニングの教育効果を測るため、参加後アンケートを依頼し、10名から回答を得た（回答率90%）。

設問1. 企画に参加したことに満足していますか?
回答：そう思う（80%） ややそう思う（20%）

理由

- 高齢者、地域の方と実際に関わることでコミュニケーションの取り方を学べた
- 学内だけでは学ぶことができない、貴重な経験ができた
- 初めて検査等を行っていい経験ができた

・先生や先輩の指導のもと、楽しく参加できた
・参加者が嬉しそうにお話ししてくれて嬉しかった
・コロナ禍で学校外の方との交流が少ない中、地域の方とお話しさせていただく機会があったことがとても良かった

設問2. 企画に参加したことで、大学での学びの意欲が高まりましたか?
回答：そう思う（40%） ややそう思う（60%）

理由
・自分の学びがどのような方達に生かされるのか、実際に見ることができたため
・まだ知識不足な点や課題が多々あることを実感した
・大学での勉強が活かせたため、より学ぼうという意欲がでた
・今回実施した評価について、もっと学んでみたいと感じた

設問3. この企画に参加して感じた気持ちとして、当てはまるものを選択してください。（複数選択可）
回答（上位項目のみ記載）： ・将来の職業や就職について、さらに関心を持つようになった（7） ・地域の課題や企業の取り組みについて、考える機会になった（7） ・大学生活を通して、さらに自分自身を向上させたいと思うようになった（5） ・専門職者として、責任を自覚して仕事に取り組もうと思うようになった（4）

理由
・就職にも活用できるし、経験値が非常に上がった。もっといろんなことにチャレンジ、参加し、意欲向上を図りたい
・課題が見えたため、そこを学校生活で変えていこうという意識を持つことができた
・地域の実際の声を聞かせていただいたことで、今後他の地域でも取り組みを広げていくべきだと感じた
・資料を作ったり地域の方と関わる上で伝わりやすいように説明を考えたりして、もっと勉強を頑張りたいと思った
・企業がどんなことをしているのか知ることができた

設問4. WebClass「DP達成度ポートフォリオ」の「社会人基礎力」にある「学生活動記録」の表に、この企画への参加を入力していますか?
回答：している（20%）、しようと思っている（20%）、 していない（30%）、そのページがあることを知らない（30%）

②新たな連携の可能性の検討

・「まちの保健室」視察

杏林堂薬局店舗で行われている、磐田市の「出張まちの保健室（注2）」を視察し、杏林堂薬局の栄養士、磐田市健康増進課の保健師らと新たな連携（大学とのコラボ企画やイベント開催・参加等）の可能性について、情報交換をさせていただいた。その中で、本学が湖西市で行ったイベント（①）について「知っている」「他の市町でも実施できるのか」といったお話をいただいた。

・大運動会イベントへの参加（ブース出展）

杏林堂薬局主催で行われる「大運動会」に健康イベントに関するブースの出展の打診をいただいたが、学生の参加が難しく、今回は見送りとなった。

【結果・考察】

① **企業・学生・教員による連携事業の実施による教育・実践モデルの構築**

昨年に引き続き、対面での活動を実施し、今年度は企業・行政・参加者（地域住民）・学生の意見を聴取することができた。

その結果、地域住民や行政には一次予防へのリハビリテーション専門職の関与について知っていただくことができた。また、イベントに参加した学生においては、学内での学びが地域・対象者にどのように活用・還元できるのかを知り、今後の学習意欲を高める機会となったことが伺えた。今回参加した学生は長期実習前の学生であり、コロナ禍において学外でのボランティア活動等が制約されていた学年である。実習前に地域での実践の機会を得たことで、今後の資格取得に向けた自身の課題についてより具体的に向き合うことができたのではないかと考える。

② **新たな連携の可能性と企業・地域への広報活動の効果**

連携企業との活動の成果については、例年大学ホームページや杏林堂薬局のSNS、リハビリテーション学部各学科SNS（ブログ、インスタグラム）にて発信を行っている。今回、新たな連携の可能性を探る中で、過去の取り組みが学外に広がり、本事業の活用、また学生の知見を広げる機会を地域と検討していける土壌が出来つつあることが分かった。

今後も企業や地域との意見交換、イベント開催等を積み重ね、本学のリハビリテーション専門職の特徴、特色ある教育実践について、広く広報していきたい。

【まとめ】

本事業は4年が経過し、本学部による地域企業との連携が形作られてきている。また、地域の課題解決のためのアクティブラーニングやリハビリテーション専門職の広報の一助としての成果も蓄積されてきている。今後は、この連携を強化・維持できる体制づくりに加え、企業との連携事業の広報を通して、リハビリテーション専門職の周知をさらに広げていくとともに、リハ学部の特色ある教育・実践機会を学生募集につなげていけるよう、検討を図っていきたい。

注1）BaaS事業実証実験について

湖西市が運行するコミュニティバスと市内企業が運行するシャトルバスが連携することで、両者の効率性及び利便性の向上、ひいては市内経済の活性化に資する施策の実施可能性等について調査・検討を行った実証実験である。

BaaSの運行ルートに杏林堂薬局店舗があり、買い物や調剤等の所用での立ち寄りだけでなく、健康測定や健康教室の開催等、活動や外出のきっかけになるようなイベント企画を予定されていたところに参加させていただいた。

参照：湖西市HP「企業シャトルバスBaaSについて」

注2）出張まちの保健室について

保健師や栄養士等健康づくりに関わる職員が、企業や磐田市内店舗等さまざまな場所へ出張し、健康づくりに関する情報発信を行う。

参照：磐田市HP「出張まちの保健室」

かけがわ健活プロジェクト～茶やっと健康測定～

代 表 者：柴本　勇（リハビリテーション学部）
連携機関：掛川東病院、掛川市役所　長寿推進課

【緒言】

「フレイル」は加齢に伴って心身の虚弱が原因で生活機能に支障をきたしている状態と定義され、身体的な課題、精神・心理的な課題、社会的な課題を含む概念である。本用語は、「Filiality」由来の造語であるが、それは我が国において本状態に陥る前に適切に対策を講ずることによって、生活機能が全廃するという状態を回避できるという期待に基づいている。すなわち、我が国において本概念は可逆性ある虚弱であり、どのような対策や対応を講じるかということが議論されるべき点となっている。そのような背景から、各地方自治体においては種々特徴ある政策が議論され実行されている。その対策の中核は、フレイル状態から要介護状態への移行をいかに食い止めるかが重要な点である。

掛川市においては高齢化率が28.16%（2022.4.1時点）となっており、その割合は年々増加傾向にある。平均寿命が延伸し、高齢者が増加していくと要介護状態の人が増加するだけでなく、その前段階のフレイル高齢者の増加も予想される。フレイルになる前、なっていても早期の段階で予防活動をしていくことが健康寿命を伸ばし、いつまでも生きがいをもって自立した生活を営むことができる住民を増やすことになると考えられる。

フレイル状態を予防していくためには、その背景要因や心身状態を知り、効果的な予防活動をしていく必要がある。Fried ら（2001）によるとフレイルは「筋力の衰え、歩行速度の低下、活動量の減少、疲労、体重減少」の５つの判定項目の中で、３つ以上に該当する場合と定義している。

掛川市では2021年度より、聖隷クリストファー大学、掛川東病院とのフレイル調査プロジェクトを実施し、掛川市の特徴を分析した上で効果的な予防活動へとつなげていく活動を行っている。2021年度は、639名に「生活機能・運動機能・栄養状態・口腔機能・閉じこもり・認知機能・抑うつ状態」の各項目の量的評価を実施し、「口腔運動低下」と「抑うつ状態」が「活動度低下」を生じさせ、運動能力低下に至る実態が明らかとなった。2022年度は、本プロジェクトの２年目であり、昨年度の結果を経時的に見るため、同様の項目を実施し、年数と共に変化する項目の有無を明らかにすると同時に、掛川市施策や事業プログラムの検討を実施することを目標に活動を実施した。

【目的】

本プロジェクトの目的は、65 歳以上の掛川市在住の高齢者に対し、生活機能・運動機能・栄養状態・口腔機能・閉じこもり・認知機能・抑うつ状態の項目についての実態を調査し、調査結果から掛川市民が要介護状態やフレイルに移行するまでの機能低下の順序性について検討する。また、2021年度に実施した対象者に対し、2022年度も同様の項目を縦断的に調査することで、掛川市が行っている事業の効果を把握することを目的とする。そして、本プロジェクトから、今後の住民サービス向上に資する情報を得ると共に、掛川市が実施する介護予防事業やその他事業に反映させることを目標とする。

【方法】

1.調査対象

2022年4月１日時点で掛川市が主催（一部、掛川市社会福祉協議会委託）する通いの場（がんばれ！筋ちゃん体操、スマイルステップ、かけがわ健康カレッジ、生きがいデイサービス）の参加者780名を対象とした。そのうち、同意書未提出者や調査日までに退会した者を除き、本プロジェクトの対象は646名とした（図１）。なお、本対象者は要介護認定を受けていない者とした。

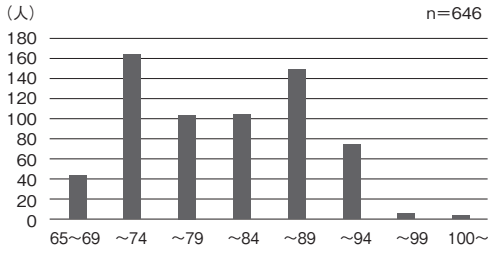

図1　調査対象者の年齢内訳

2. 活動期間（調査期間）

本プロジェクト活動期間は2022年6月1日から2023年2月14日であった。

事前打ち合わせ等を含めた本プロジェクトの活動は合計45回であった。

3. 調査方法

調査は、普段の通いの場での活動の1回分の時間（1時間から1時間半）で実施した。最初に本プロジェクトに関する説明をし、参加について書面にて同意を得た。今回は同意書にてデータ提供の了承が得られた者のみのデータを採用し、自身の健康を振り返るために測定し、データ提供なしという条件でも測定に参加ができる選択制とした。事後に同意を撤回することも保証した。

参加者は、事前もしくは当日の空き時間で自記式質問紙による回答をし、理学療法士による説明のもと、各項目に関する身体的評価の実施をした。

当日の測定は1回20名以内とし、掛川市長寿推進課職員や生きがいデイサービス職員（委託先）、教室に参加する介護予防ボランティアに測定補助を依頼し、安全面に配慮し、実施した。測定補助者に対して事前説明会の実施をした。

4. 倫理的配慮

本調査の実施にあたっては、聖隷クリストファー大学倫理委員会から承認を受けた（聖隷クリストファー大学倫理委員会承認番号：21033）。

5. 調査項目の概要

本プロジェクトは、掛川市で平成18年から継続的に実施している基本チェックリストの項目を参考に、生活機能・運動機能・栄養状態・口腔機能・閉じこもり・認知機能・抑うつ状態の全7項目から調査項目の選定をした。

今回の調査項目の選定にあたっては、今後、地域住民主体の通いの場で今回測定に使用した項目の一部を定期的な評価として実施できるように、怪我のリスクが高い測定や専門的な知識を有する測定ではなく、方法を学べば住民同士で安全に測定が実施できる内容を設定した。

【調査結果】

1. 前期高齢者と後期高齢者の結果

本調査では、要介護状態への移行やフレイルへの移行に焦点をあてたため、前期高齢者（N＝207）と後期高齢者（N＝439）に分けて結果を分析した（図2、図3）。

本調査から、2022年度では口腔機能が前年同様低下傾向であったこと，抑うつの割合が向上したのが特徴的であった。

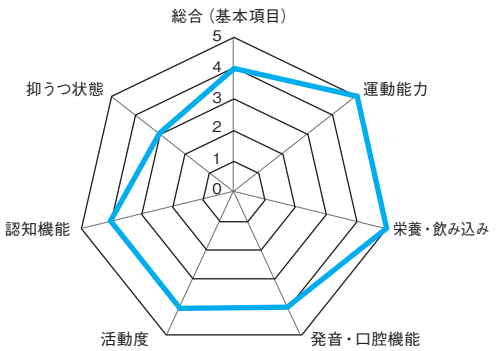

図2【前期高齢者の状況（高得点＝良好）】

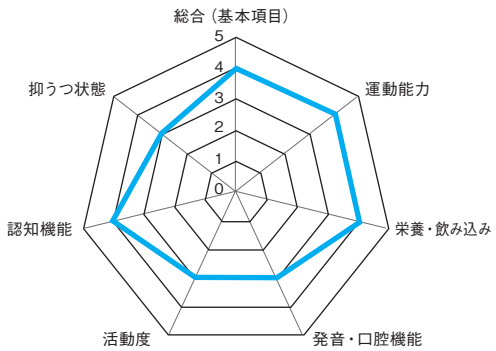

図3【後期高齢者の状況（高得点＝良好）】

2. うつ傾向・不安障害の割合

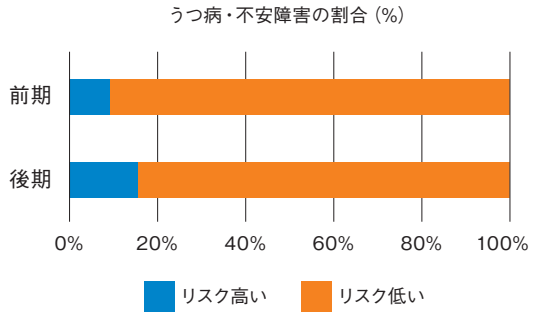

図4【2021年度】

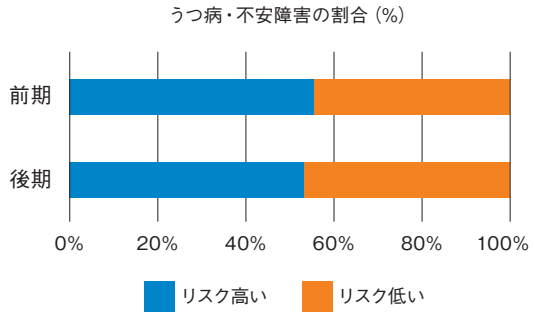

図5【2022年度】

2021年度に比べて、前期高齢者も後期高齢者もうつ傾向を示す割合が高くなっている（図4、図5）。原因については単純に論じることはできないが、2022年度の特徴と言える。今後この点は注意深く観察していく必要があると思われる。

3. 運動機能

①5m歩行テスト

５m歩行テストのm/秒と年齢に負の相関がみられた。これは、年齢が高くなるにつれて、1秒で歩ける距離が短くなることが要因と思われた。92歳を境として基準値を下回る傾向があった（図6）。

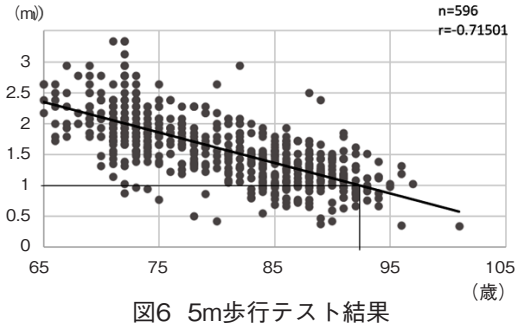

図6　5m歩行テスト結果

②30秒椅子立ち上がり

30秒椅子立ち上がりの回数と年齢に男女共に負の相関がみられた。男性は83歳、女性は87歳を境として基準値を下回る傾向があった（図7）。

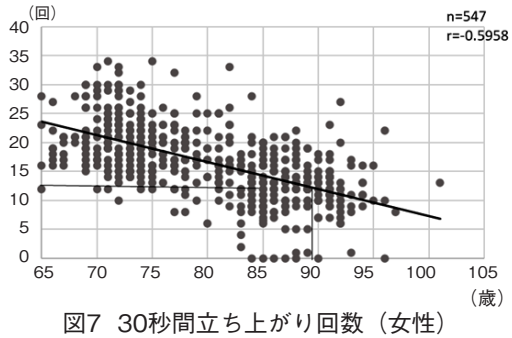

図7　30秒間立ち上がり回数（女性）

4. 2021年度と2022年度の縦断比較

2021年度と2022年度の2年間調査した491名の特徴としては、最長発声持続時間有意に短縮した（P＜0.001）。ただし、歩行と筋力は1年間で有意に高くなった（P＜0.001）。本対象者は運動練習を行っており、普段実践している機能は向上することが見いだされた。今後は口腔運動を含めた全身的な活動と気分を上げる活動が、掛川市の高齢者施策として必要と思われた。

【連携の成果】

本プロジェクトは、産・官・学の三者が共同して、掛川市の高齢者の現状を把握し掛川市の長寿を推進する施策のための基礎データを調査することにある。2022年度の調査から、三者共同し専門性による分担をすることによって掛川市の現状把握が適確に把握できた。

【本プロジェクトの公表】

・第26回静岡県理学療法学術大会（静岡県沼津市）2023年6月17日　演題採択済
・The 2023 Asia Pacific Society of Speech Language and Hearing Conference （ホーチミン、ベトナム）2023年12月14日　演題採択済

2022年度地域連携推進センター運営会議
委員一覧

センター長	吉本　好延	リハビリテーション学部理学療法学科　教授
副センター長	大場　義貴	社会福祉学部社会福祉学科　教授
委員	渡邊　輝美	看護学部　教授（2022年9月まで）
委員	氏原　恵子	看護学部　助教
委員	篠﨑　良勝	社会福祉学部社会福祉学科　准教授
委員	小坂　美鶴	リハビリテーション学部言語聴覚学科　教授
委員	飯田　妙子	リハビリテーション学部作業療法学科　助教

2023年度地域連携推進センター運営会議
委員一覧

センター長	吉本　好延	リハビリテーション学部理学療法学科　教授
副センター長	大場　義貴	社会福祉学部社会福祉学科　教授
委員	氏原　恵子	看護学部　助教
委員	内山　敏	国際教育学部こども教育学科　准教授
委員	Christine Kuramoto	リハビリテーション学部言語聴覚学科　准教授
委員	飯田　妙子	リハビリテーション学部作業療法学科　助教

地域連携推進センター年報
第14号（2022）

2023年12月1日発行

編集　聖隷クリストファー大学　地域連携推進センター
発行　聖隷クリストファー大学
〒433-8558 静岡県浜松市北区三方原町3453
TEL 053-439-1400　FAX 053-439-1406
制作　日興美術株式会社

地域と歩む

聖隷クリストファー大学
地域連携推進センター